

川柳塔

昭和五十六年十一月二十五日創刊
昭和五十七年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六五六号



日川協加盟

No. 656

同人特集・私の一句

一月号

謹賀新年

電波新聞社

東京本社

東京都品川区五反田一丁目二一五

大阪本社

大阪市北区中ノ島三二二四

(朝日新聞ビル内)

投稿欄案内

川柳 選者 橘 高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者 小寺 正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者 佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

※優秀句には掲載紙をお送り致します

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(首)以内、投稿随時・自由課題

〈投稿先〉

〒530 大阪市北区中之島三 二 一四

(朝日新聞ビル内)

電波新聞大阪本社学芸部あて

(川柳・俳句・短歌を明示)

生酏辛口

きもとからくち

料理がいきる
辛口の本格派



菊正宗



菊正宗

神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

祝 日川協理事長茶六氏傘寿

天皇の傘寿にあやかると今日この幸

祝 独仙氏タイア婚

タイア婚さてこれからののみ直し

呵々大笑 七十三歳 初笑い

初暦はやこまごまとスケジュール

犬小屋に注連飾りあり目出度けれ

栗

西尾

主幹の快気

昭和五十七年の新春を、めでたく迎えた。昨年は当社にとって、主幹を初めスタッフに身体の不調が多くて心配したが、今年是非そんな嫌な風をふきとばしたい念願である。年末の十一月二十五日に、主幹は五月の発病からちょうど半歳になったのを機に快気の宣言をされて、あとはハリハビりに専念する旨の御挨拶をもらったので、先ずは愁眉を開いた。主幹のお座敷の欄間に一陽来復の横額が懸っている。どうぞ文字通り新年を期して一陽来復でありますことを希求する。

残るは小松園、好郎、多久志、静馬の諸氏の一日も早い御快癒を祈るのみである。

さて、気分を転換して素晴らしい話をお伝えしよう。それは出雲の同人原独仙氏のタイアモンド婚式である。金婚式というのはよく聞かれども、

タイア婚は僕にとって、独仙氏が初めてである。結婚六十年がタイア婚というそうだが、その先の七十年、八十年は何婚かと調べたが、どこにも書いてない。それで、独仙氏にきいてみたが氏も知らない。だからタイア婚は結婚の最高峰である。独仙氏も奥さんも同い年の七十九歳だそう。八カ月ほど氏の方が兄貴らしい。そして十九歳の結婚だったとき。

一昨年の松江に於ける同人総会の時の、氏の元氣は素晴らしいものであった。酒量といい、声量といい、あれでなければ第二、第三のタイア婚はやってこない、必ずやってくる。何しろ、お目出度いことである。自重を祈る。

謹んで同人、並に誌友、柳友の御健勝を祈って新春の挨拶とする。

川柳塔新年号

座右の句

打ち明けてくれた十字架共に負い

(千代)

私の句

浮きくもり朝のガラスを磨きあげ

青戸 田鶴

川柳塔 新年号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

| | | |
|-----------------------|-------|------|
| 主幹の快気 | 西尾 葉 | (1) |
| 新春つれづれ記 | 若本多久志 | (2) |
| 新春御挨拶 | 中島生々庵 | (4) |
| 川柳塔(同人吟) | 西尾 葉 | (6) |
| ■川柳太平記(44) 古島一雄と正岡子規 | 東野 大八 | (28) |
| ■連載 誹風柳多留廿六篇研究(四丁―五丁) | | (30) |
| 〈同人特集〉 私の一旬 | | (32) |
| 秀句鑑賞 「同人吟」 | 西田柳宏子 | (40) |
| 水煙抄 | 児島与呂志 | (59) |
| | 正本水客選 | (42) |

新春つれづれ記

若本多久志

凡聖一如元旦のころ知る

路郎

ベーターペンやニューベルトの名曲よりも
我々の胸に強く響くのが除夜の鐘である。

これは年越の夜、各寺院が人間の百八煩惱の解脱を祈念して打鐘されるものであるが、
聴き終えてしばし時が移り「ああ、新年だなあ」と意識したとき、胸に湧き起る想いは、
まず神仏の冥加と四恩へのしみじみとした感謝の念であり、次いで新しい年への計画を樹て、仕事や生活への修正を図る。
これが昔からの大和民族たる日本人の心ではなからうか。

◎ お元日 坐るところへ坐らされ 路郎

酒好きの路郎先生は大晦日の夜更まで飲み歩いて、友達に別れた時がお元日、という句も残しておられるから、元日の朝、坐る所へ坐らされてお雑煮の膳につかされる苦痛はさぞやとお察し出来るのである。

さてその「雑煮」は昔から正月料理の献立中で、最も重要な地位を占めたもので、「貞丈雑記」という江戸初期の書物によると、雑煮の本来を「ほうぞう」と言い「氣を益し(精

句評リレー(伊藤茶仏・香川酔々・濱野奇童・河村日満)

愛染帖

橋高薫風選

披講技術について

直原七面山

■随想 機械が秀句を憶える話(2)

竹内紫鏑

「素直」

江口度選

一路集「エプロン」

小笠原有里選

「巢」

大塚豊生選

初歩教室

本田恵二朗

大萬川柳「最終」

川村好郎選

柳界展望

(76)

本社十二月句会

(85)

各地柳壇へ佳句地10選・中川滋雀選

(89)

編集後記

薫風・酔々・鬼遊・史好 (97)

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

父と母と坐った位置に妻と居り

高木桃里

氣)中を温め(身体)小便を締め、大便を固める効能がある」と記されている。つまり、臟腑を保養することによって「保臟」とも書いた。

調理の方法は地方によって多少異なるが、大別して上方の京・大阪では丸餅を茹でて白みそ仕立にし、子芋、大根、れん根、ごぼうなどを入れる。

因に前田勇氏の「近世上方語辞典」によると、雑煮を「ぞうにん」と言い、餅のことを「おかちん」と言う。又醬油で菜を入れたのは「くさだち」根深(ねぎ)を入れたのを「なんばかちん」と言うとある。

この「おかちん」という言葉は大正の初期頃まで、大阪では通用していたのを記憶しているが「ねぶか」は今も中年以上の大阪人には生きているようである。

さて一方、江戸(関東)地方では切り餅を焼いて、すまし汁仕立にして青菜を加え、削り鯉を少々かけて食べるのが通常である。

江戸人が味噌仕立を嫌うのは「みそをつけ」という意味の縁起づけからだとも言われているが、一面、関東・関西の人間性をよく現わしたのとも考えられる。

いずれにせよ、酒好きの路郎先生が正座に坐って、ご一族と共にお雑煮を召上った情景を想像すると、ちよつとユーモラスな微笑が浮んでくるのである。

新春御挨拶

中島生々庵

おめでとございます。謹んで昭和五十七年の年初のご挨拶を申し上げます。

先ずもって昨年は正月十五日成人の日に私共の川柳塔も十五周年を迎え、高々と祝杯をあげさせて頂きました。その上、本年は五月号を以て川柳塔二百号を出すことが出来ますことは一方ならぬ皆様のご支援とご指導の賜物に外ならずと厚く厚く御礼申し上げます。

昨年は誠に身辺多事、川柳塔にとりましても戸田古方氏、小西無鬼氏等有力な同人を失い、また小生個人にとりましても、五月末突如、脳血栓に倒れ右上下肢不随と相成り、何やかやと一時は極めて憂愁な暗雲に包まれました。しかし年来の宿願であった事務室及び編集部に移転新装なり、薫風を長とするスタッフも面目を更めて勢揃いし、目ざましい活動をつづけております。また私も幸いにも言語並びに意識の障害も全く癒え、その後順調に経過し補

'82 頌春

中島生々庵

西尾 栞

若本 多久志

川村 好郎

菊沢 小松園

正本 水客

橘高 薫風

参事 一同

常任理事 一同

助杖を用いて歩くことが出来る程度に快復いたし、この上は一日も早く全快の上親しくお目にかかり何かとご配慮、ご厄介かけました御礼を申し上げます、鋭意リハビリ等の加療につとめております。

人間万事塞翁が馬という言葉がありますが、私事此度の全く不慮の出来事により我が川柳塔社一同の堅い和合と信念が如何に強固であったかを今更の如く具体的に知らされた次第であります。これはいうに及ばず麻生路郎先生からのご遺徳によるものと痛感、各員火の玉となつての精進と心から感銘を禁じ得ません。

本年は、はからずも壬戌の年に当り私はいわゆる年男ということになります。この七月で満八十四歳になるわけですが、日ならず全快の晩には新鮮な気持の昂揚を失わず、皆様のご支援により一層のご奉公を申し上げます。いと覚悟いたしております。よろしくご指導の程お願い申し上げます。

病 中 吟

寝たきりになりたくない リハビリのきびし

何事ぞ神仏恐れぬわがまま気まま

眠たい夜もあろうに老妻の眉暗れる

右手に添え左手でうける祝酒

見舞客毒舌たしかめ腰をあげ

理事 一 同

企画部 一 同

句会部 一 同

編集部 一 同

ビタミン
肉体疲労時のVB₁₂補給に

アリナミン[®]A

アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆わたくしは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。



武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

川柳塔

西尾 葉選

青森市 工藤 甲吉

元旦やきようは手垢のつかない日
元旦の酒きらめいてひろごれり
元旦は少しむつつり屋もしゃべり
この冬もちろりと共に在り在りて
短日を老いは二食で間に合わせ
鱈ちりへこの冬も無事同じ顔

松原市 谷垣 史好

暮しとは日々ガラクタがふえるなり
吾輩もちと苦々し猫の本
月下弦男がこうと決めたこと
人の情がふつつと煮える関東煮
一月一日から溜息つく男
日めくりも折目正しく三カ日

大阪市 小出 智子

祝箸女系家族のきざしあり

お隣も孫が来ている笑い声
やさしくなつた夫を寂しくみることも
あんみつを食べたぐらいで気を晴らし
子を山へ送ってからの風の音
古いものが弱くて老母を哀します

大阪市 金井 文秋

まだ七十もう七十の明と暗
見舞客に白髪染めてたのがばれる
辞書繰ってやっぱり仮名のままがよい
他人の目になって私を見詰めた
健康法教えてくれて先に逝き
脈のないのにセールス名刺置いて行き
草もみじ試歩のいのちをいとおしむ

米子市 八木 千代

出稼ぎの道裸木に見送られ

流水の夢をオーロラ染めてみせ

電話線にこめた銃弾だつてある

庭石の苔どの子とも遠く住む

万全の手筈へ祭り雨となる

大阪市

河野君子

アルバムの私にはげしい通り雨

姉妹逢う楽しさで里の喪にせずむ

慶弔の谷間で齡をとつてゆく

はるくればの思い一途に紅葉炎ゆ

十二月齒科医の椅子で木偶になる

女ひとり師走の街で溺れよう

鳥根県

堀江正朗

七十は七十の音まるく聞く

怒るときみじめさだけが背を走る

想い出が絵になる笈の音の中

雰囲気でハイハイハイと歩を合わせ

白杖よ頑張れ僕の手の中で

手の動きより忙しく音は逃げ

東大阪市

市場 没食子

よう出来た婿にめでたく酌ぎ足され

代議士の数も行革減らせかし

寮歌祭腰のタオルがまたナウで

何やかや老宅出向く用が出来

バスツアーで篠山へ

デカンショの外に立杭登り窯

八尾市

高杉鬼遊

フォークにもナイフにもなる箸二本

演壇の花は主役にはなれません

滄桑の裏西成の月が冴え

米つくる人をうらやむふところ手

友だちがなんにんもいる町の犬

八尾市

香川酔々

脂肪のる秋刀魚話題として平和

石仏の半眼閉じる秋の風

脱サラをきめて買いこむ原稿紙

千枚田耕し夫婦島を出ず

免罪符風に飛ばしている詩人

岡山県

濱野奇童

寝正月あと半生の線をひく

設計図まだまだまらぬ寝正月

舞台裏キッスの味がまだ残り

癒す気の旅から傷を持ち帰り

まだ遊ぶ気らしい凧の糸が伸び

倉敷市

水粉千翁

初春へ兎に角という背を伸ばす

わが道の長さの夜明けだとおもう

賀状読む一枚ずつにある吐息

よみがえる涙もろさよ羽根の音
つつがなしとはおこがまし年明け

竹原市 山内 静水

窓すこし開けて娘を送る朝

秋最中個展の中で茶をよばれ

ささやかな募金ペンネームで記す

掌を合すお墓いずればはいる墓

読売新聞「この人」に載る

栄光は未完のままの顔写真

和歌山市 野村 太茂津

君が代へ殊更老兵背を伸ばす

日章旗立てていくさは拒みぬく

これからも吠えぬがいつも唸つてる

激流を乗り切る舵はいつも持つ

宝とも思う多彩な友ばかり

鳥取市 河村 日満

友多き倅せ年賀はがき購う

五体意に逆らうばかり古稀近し

婉曲にくる陰口へ湧く闘志

肩書きがとれて庶民の眼に戻る

菊の香にむせて戻った文化の日

新宮市 大矢 十郎

親善で円を稼いだロイヤルズ

ゴルフをしながら不足言う世とはなり

うちのより良さそなテレビ捨ててあり

腕時計内側に来て病み上り
不況風役人だけは避けて吹き

島根県 藤井 明朗

しあわせの足音つづく初詣

衣食住足り幸せを見失ない

思い出の日記閉ざれば新春の音

ひと白は孫が杵もつ喜寿祝

家中の和が幸せを呼んでいる

桜井市 岩本 雀踊子

手のひらに転がる嘘が一つある

雑布のしづくは女の涙かも

ちっぽけな夢がシャボン玉になる

逆算をしたがる女の失語症

妥協せぬ妻が切札持っている

米子市 林 瑞枝

落葉掃く素直な頬に過去は消え

愛結ぶ紅葉一葉の旅便り

子にかけた夢朗報を抱く家路

ぼたん雪ささやく電話と知らず待ち

鍵っ子の画帳の色にある憂い

兵庫県 遠山 可住

大学が無理で素直に家を継ぎ

アルバイトに出て脱線の畏がある

豚の仔が並びほほえみもらう朝

因数分解別れる道を考える

Uターン夢を拾いに行つた道

倉吉市 奥谷 弘朗

吉報を待つ妻床に菊を活け
二人きり言放題にすぎる日々

欲捨てて擱んだ満足かも知れず

決着は玉虫色でごまかされ

逃げ道もちゃんと決めてのご答弁

大阪市 川口弘生

渦一つ抜けて笑える人となる

自己的に愛して檻の傷知らず

玻璃の名で呼べば御物めくガラス

用を足す単語を探している無口

許し合う二人で憎まれ口叩く

大阪市 西森花村

我が道を行く犬堀の下を掘り

カタカナで書けばスペルも気にならず

円周の一点暮も正月も

忘れたい日だから記憶によく残り

ほこりのタコ焼き花壇へ向き直り

大阪市 弘津柳慶

離婚して女の強さを知らされる

辛い時いつもそこには妻がいた

本心を隠して兎も角折れて出る

ぼんやりと二次会までは覚えてる

理由など刑事は軽く受け流し
京都市 都倉求芽

場違いのように画廊の視線浴び

黒部へ行った日から下着冬にする
ばれかけた嘘を急いで仕舞つてる

庭の隅自作の勲章菊の花

花鉄花に心を試めされる

岡山県 嘉数兆代賀

新春へ羽ばたく羽をたしかめる

本当のわたしを探がす橋に佇つ

あたたかい心を木洩日からもらう

湯豆腐へ明日の風は考えず

鬼になれと風がささやく曲り角

富田林市 岩田美代

哀しい程澄んでる秋で裏切れぬ

倅せの錯覚ガラスが曇つてる

霧囲気に合うやき芋で座が和む

いつの日かもたれ合うてた石仏

春炬燵どうも野心を抱いている

藤井寺市 児島与呂志

日めくりの明日があるから大事にし

氏神さんにだけは報告しとく悩み

どうしても去年の悩みがひっかかり

しょうむない石拾うて来る大和川

生き甲斐を持たせる言葉かも知れず

岸和田市 高橋操子

よごさないハンケチも持つお正月
アンケート愛国心にもえていた

老骨にむち打つ等はしてならぬ
風おもてにそれぞれ立って娘たち
きく効かぬ議論ハラ／＼待つ患者

島根県

堀江芳子

ご期待に添えず悪妻にもなれず
一年の速さは桜から雪に
偶然の恐さはこんなところで会い
かわりのない顔で聞く気の軽さ
失明をしても戦の話好き

伊丹市

檜谷寿馬

怒鳴っては男涙しては父
立冬に赤提灯の色冴える
終電車車庫を信じてひた走る
松島大根瘦せたいとも思う
じゃが芋が一番幸せだと思ふ

八尾市

大路美幸

妥協した影を野良犬踏んでいく
老犬が振り向く冬の男坂
わらべ唄小首かしげた犬が居る
今日の餌が欲しくて忠犬とも言われ
犬いつか人間を飼う夢を見る

堺市

高橋 千万子

ひっかかる事あり連休半端な日
飲みすぎを子から妻から主治医から
日記見た日から募ってくる不信

知る弱さ知らない強さ言いつのる
毛皮ふんばつしたと友が来る

八尾市

宮西弥生

万札の最後の一枚くずさない
運命線真直ぐもっている勝負
二、三日寝込んでテレビ疲れする
終い風呂最後のひとりで覗かれる
結婚しない女につづく青春譜

奈良市

森田カズエ

目じるしの絆の端に父と母
鼻声で云う冗談にみた本音
おしゃれ染め見本にずれた染めあがり
風紋に佇てば聞える亡母の声
毛の長い方が男とふと気づき

ハワイ

前山北海

雷雨霽れ初雪のケア仰ぐヒロ
流燈の西へひたむきすいすいと
修養のほど浮び来る言葉尻
炎天のドライブ果てぬ熔岩の道
住み古りてはや七十年島の秋

倉敷市

野田素身郎

K老人日向ぼっこも三揃い
自宅療養丹念に見るコマージュナル
自宅療養お隣と妻また出掛け
自宅療養妻に写経をすすめられ

菊日和すこしずつ距離延びる試歩

松江市 恒松 叮紅

決心を自動ドアにうながされ

四季に咲く中にも菊はやはり秋

負け犬の男へそぐ小糠雨

お爺さんを味方につけて買わされる

秋深し無職がネクタイ締めて出る

松江市 小林 孤呂二

誰も居なくてよし秋の酒を抱く

坐りたい椅子先輩は追い越され

役人の翅鳥知らずが多すぎる

公務員のポーナスまたも先に出る

松江市 舟木 与根一

老兵は消えよ職場にまた機械

大安を選び依願退職に印

やあやあ君も初老か盆栽展

お馬鹿さんねと母性本能疼かせる

顔でないと思うアベックにまた出会い

西宮市 藤村 メ 女

約束もころつと忘れる十二月

妻の声子の声年末らしい声

どのチャンネルもお歳暮のコマーシャル

ついてくる影を抱きたい日の孤独

コンパクト開いて女にある嫉妬

富田林市 和田 維久子

紫の紐を結んで抱く子犬

猟犬の足にあやかる初日の出

踊る阿呆に踊らす阿呆も居て世間

感情線の移動か舌の短か過ぎ

良いムードの隣に座る冬の風

竹原市 森井 菁居

主義主張答は歴史に任しとく

父として後姿を考える

家建てて昔むかしを忘れかけ

解禁の猟へ情けが邪魔になる

他人本願でないセールスのタイミング

竹原市 小島 蘭幸

ブラックコーヒーゆっくり起きてくる女

財布落して私は不眠症になる

父の軒に安心感がある

ホップステップジャンプ長女も七五三

お元日人間の貌取り戻す

大阪市 津守 柳伸

かあさんがあばたもえくぼにしてしま

バラ色をまだ信じたい五十坂

あの星も彼に似てくるくもの糸

運命の星を恨むと石になる

しがらみへ命は邪魔な風の糸

大阪市 天正 千梢

かりそめのやすらぎをいう易者かな
自己陶醉自分を犠牲にしすぎて

灯火したしみ漫画読みあさり

まだ詩吟うなっているので大丈夫

白い吸取紙じわ／＼汚れて青春終る

東大阪市 齊藤 三十四

灰皿をいっぱいにして恋つものる

車椅子団体客の中分ける

神輿が通る母の拌む場所

裏町に笑い袋が落ちてゐる

老友会谈山明日香紅葉道

倉吉市 渡辺 苦句

おしあわせですなと犬撫でて言う

母さんには神の使いの白い蛇

魔術師の自分が自分消してみせ

立話車ノロノロ避けてます

公園に女がひとり至近距離

大阪市 北 勝美

正月はこちらでせよと息子の便り

小春日に一きわ赤いピラカンサ

大佛さん日本一のおぐら組み

山の辺はつまづく石にもある歴史

ふる里は遠くなりけり母他界

守口市 羽原 静歩

おめでとう去年の肩をゆすぶって

マンションに日の丸明治が生きている

福寿草師たり弟たり初春明ける

もうそんなお歳かヤレコロアドッコイシヨ

初春の三番叟ほろにがくほろにがく

倉敷市 稲田 豊作

日が走り月も走って喜寿の新春

聖典の一行明るい灯を点す

苦勞まだ足りぬと苦勞が追いかける

足し算の結果を目減り笑ってる

泣いて笑って人間模様織りあがる

今治市 越智 一水

眼鏡拭く父の背老いを隠せない

息切れがしそうだ嫁ったりもらったり

妻と子に責められ兄弟ふと思う

輪の中にいるとき口だけ合わしとき

雲までが急いでいるよ十二月

倉敷市 白井 三林坊

ホトボリがなか／＼醒めぬロッキード

繋がれて何時の間にやら孕まされ

つつましく袖の香りを愛す妻

平凡な一年だったそれでよし

初孫のシッコウンコを嬉しがり

鳥取県 川崎 秋女

何を思い何を企む冬の雲

握手した右手左は何思う

失職へ人の情もふつと秋

石抱いた過去女が丸みもつ

目を閉じて父が最後の断下す

岸和田市 福浦 勝晴

文学に縁なき妻でも妻は妻

うそつきと山勘飲み屋でウマが合い

元旦の下痢腹痛はさまでなし

ずるずると銀婚式まで来てしま

パチンコの後ろの咳が気にかかり

硝子細工のような夫婦で底い合い

開き直ると勝利の神が媚でくる

一点を凝視策士のふところ手

嫁はんに弱い息子をはがゆがり

噂まいて拾って美容院はヒマ

一步退く一步銃口追ってくる

中流の声宰相をあわてさせ

争いを見届けて去る仕掛人

吊皮のハミング白い指に媚び

方言の訥々として人をうち

数え唄月と男の影法師

しまい風呂黒子のままで満ち足りる

ぎんなんが落ちて踏まれた御堂筋

一十一三にはしたい十二月

改築のプランへそくりにも聞かし

ロボットのつか自動改札機

一服のタバコで王手考える

羽曳野市

塩満

敏

美祿市

安平次 弘道

岡山市

時末 一灯

松原市

玉置 重人

痛む足エスカレーター修理中

空翔る想いで新婚旅立ちぬ

紅白のひもがついてる敬老乗車券

子育ての声甲高い宵の露路

待ち合わす橋の袂のアーチ灯

大根と柿も吊して駐在所

親切は陽動作戦かも知れず

密漁者が待つとは鮭の知らぬこと

北炭悲話(二句)

斯くなるど知りつつガスの炭坑に入る

承認書夫に止めを刺す涙

移る世や松はめでたきものでなく

休耕田もう取り返しつかぬ処女

それでもと渋柿守る老いひとり

無駄飯は食わぬつもりで管理職

愛情が私もほしいオンライン

電話する向うも風邪を引いた声

若返るつもりもヨガで痛む腰

いらだちの心かくせぬプッシュホン

老体の始動は庭の落葉から

化粧してお越しはどちら市場籠

控え目な化粧で友の喪に服し

出雲市

原

独仙

平田市

久家 代仕男

兵庫県

河原 みのる

米子市

小西 雄々

切れすぎる小姑が居て傷だらけ
春日和猫と猫背が留守居番

香川県

岡田拳法

新聞の書かぬニュースがニュースかも
ゴシップを取ると週刊誌は紙だ

なんとなく群れて政党なんちゃって
じゃらじゃらと各党おなじ事を問い
ご近所になりふり構わぬソ連いる

鳥取市

両川洋々

俺の靴朝のいくさへ揃えられ

半世紀めくるとページに酒が沁み
車座の中の一人が振る叛旗

子を産めぬ丸い乳房が哀しくて
笑わない素顔をピエロ持っていた

和歌山市

西山幸

黄葉紅葉みごとに枯れてゆく悟り

私をころす雑布縫い溜める

湯豆腐が煮え自己過信崩れだす
合わす手も貪欲になり生きている
他人へは笑い上戸になつておく

和歌山市

浦野和子

祭笛父の大きな背が好き

銀杏の実に余るほど知恵遅れ
真実を追うて渦中の人となる

殿さまの知恵が生きてる紡ぎ唄
嵯峨もみじ王朝絵巻の彩で散る

和歌山市 福本英子

手の届くところで紀淡の海荒れる
ローカル線お国訛りの秋の彩

小松島港で

廃線ハチクワ屋さんも幟り立て

リハビリの靴に馴染んできた笑顔
ドアチエーンセールスマンとの距離みせる

和歌山市 松原寿子

ひたすらに慕情を刻む砂時計

触れた掌の大樹の余韻持ち帰り

四百字詰めわたしを晒す半生記
火の言葉灰には出来ぬ玉手箱

地に還るまでを枯葉の子守唄

大阪市 江城修史

子に賭ける苦勞が妻にだけ過ぎる

青春譜想われびとは想い人

ああ平和飢えし記憶の鮮烈に

めくるめく想いかけらもない夫婦
長老と言われて世話が一つ増え

奈良市 宮口笛生

助からぬ命見守る長い夜

亡母と逢う旅立ち髭も剃つてやる

こおろぎも死んだか父も死にました
父の居間がらんと隙間風残る

ご詠歌の音痴を遺影に笑われる

奈良県 村上春巳

文化展小さな町にある活気

文化祭老人くらぶの菊の香よ

始発から釣りの話が合う客と

来る年へ編機の音が高くなる

幸せな賀状は近況添えてある

愛犬もあとさきにつく初詣で

いのちある限りを楓燃えに燃え

炬燵灰こさえる藁を焚く秋日

喪の胸に菊は見事に咲き誇り

あちらにも思わくあり気な顔と逢う

展示会一日だけの夢に酔う

秋空が高くとかく澄んでいる孤独

秋冷へお茶の温さを手でかこみ

犬の耳はねて妥協を許さない

被爆者へ千の祈りで佇ちつくし

四季多忙ある日気がつく秋の色

とき／＼は反らすガタついてきた背骨

ひとりごと云わねば耐えきれない我慢

忙しいとこぼす生活の楽しそう

裏町の小さな陽だまりを菊匂う

エプロンで若返りたしお元日

美智子妃の帽子高からず低からず

島根県 榑原 秀子

島根県 錦織 文子

大阪市 本間 満津子

大阪市 神夏磯 道子

目立たない色で支えるセロテープ
白黒をつけて虚しくなりました
ワンカップこんな町にも居てくれる

守口市 野呂 右近

平凡に自慢も悩みも無い余生

愚痴にして過去を語ってはならぬ

梵鐘の余韻の中に住む故人

走らねば廻らぬ頭の風車

何か言い忘れた様に暮れる歳

兵庫県 辻 文平

シヤネル五で消されぬ罪を一つ持つ

七人の敵それぞれが読む弔辞

定年の影絵妻子に覗かれる

一杯の梅酒が姑となごませる

黒を着る自信が墮ちる女坂

大阪市 黒田 真砂

子には子の想いがあつて星流る

両の手に余る倅ためて老い

京の街心を洗う風が吹く

散る紅葉みんで絆をたしかめる

平行線たどる親子の落し穴

寝屋川市 柴田 英壬子

裏町に昔偲ばす菊の鉢

正座した姿で甘い富有柿

税を知る週間わたしも聞いておこ

動物に証明させるコマージュ

狛犬を描きおだやかな初春を待つ

寝屋川市 江口 度

笏をもつ手でダイヤルまわす七五三
ノイローゼ世に勝ち負けが多すぎる

耐えているそれは小さな涙壺
伊達眼鏡かけて養子の口探す

自衛隊高いおもちゃを持たされる

岸和田市 原 さよ子

同窓会 三十六年目に伊勢旅行に参加して(三句)
教師冥利しかと抱いた伊勢旅行

三十六年の重みひし／＼同窓会

呼び捨てにされて童心とりもどし

予定表ぎつしり詰まる余生かも

ほしだけ持てばバイバイもみじの手

堺市 大道 美乙女

張り切ったところに憎い秋の雨

トップ記事また銀行の使い込み

赤トンボ夕焼空に歌がない

立読みで苦学の頭を支えられ

ライバルがいるから張りのある日だよ

京都市 山本 規不風

正論を正面切つて悔い残し

葛藤を操る白い手が綺麗

欲の目の鴨がマルチの網にゐる

見えぬ運信じられないのにブーム

銀行は蛸足を喰う罪にする

信じてる。その一言を噛みしめる

伝言板端まで読んで無関係

神様の名前も知らず掌を合わせ

角かくしにかくしきれない角があり

これだけは私のせいでない器量

三面記事私であつたかも知れぬ
玉手箱早く老いたい時もある
ハンカチに大事な嘘を包み込む
許されぬ情と知つてる秋桜
花言葉信じて紅いバラを買う

神戸市 山口 美穂

この感激言葉にすればかるくなり

この町に慣れて祭の寄付を書く

自画像に化粧させねば絵にならぬ

背景に雪を降らせてみたい女

わたくしの尺度で吐いた言葉悔い

西宮市 杉浦 婦美子

白鳥を羨む子等の綴方

そばの香が漂う頃は母忙し

恐しい空白酒の力借る

複雑な事情にドラマ雨降らす
曖昧に云うてはならぬ事を云い

青森県 五十嵐 操 史

振りむけばきつと振りむく山の峰

富田林市 板尾 岳人

振りむけばきつと振りむく山の峰

富田林市 板尾 岳人

山の峰未婚の母となる樹氷
雪しんしんやがて妊る山の峰
ちよつとずつちよつとずつ峰白くなる
同衾を許さぬ峰は不眠症

大阪市 那須鎮彦

蔭口を天国で聞くひきよう者
ジヨギングの後ろで枯葉舞いおちる
なでられてとまどっている吠えた犬
えらそうに云うても妻に裁かれる
けんめいに生きるしかない俺である

富田林市 中村優

みそ汁が匂うて母を主座に立て
幸せを半歩後へ引くローン
建前は与党本音は野党好き
歴史また区切りをつける札の顔
黄門の印籠が欲しいロッキード

大阪市 西出楓楽

誤字脱字神も苦笑してる絵馬
エネルギー勉強なんぞに使えない
青年の大志マイホームとは淋し
窓ガラス磨けば世間が見えそう

大阪市 欄蘭

降るような星を眺めてバスを待ち
三ヶ日腹を立てまい怒るまい
縁の下の力持だが甘んじる
仲悪い奴から賀状来るも齢

鳥取県 林露杖
かけまくも畏し杜の初明り
かしわ手の届く辺りに神御座す
消ゆるなき諸悪諸業や去年今年
群雀稲架に小紋の模様描く

鳥取県 金川満春

秋の夜を小さな幸よ老い二人
電話して一応義理は果しおき
花の色に染ってみたい日の奢り
少々の酒で満足した軒

鳥根県 木村はじめ

一言の失言仕舞う場所がない
豪華ショー現実が外で待っている
人生にシグナルがなく又迷い
なるほどと直ぐ妥協する不甲斐なさ

鳥取市 岸本無人

民謡の元唄聞かす国訛り
言い足りぬところは相手の手を握り
毛糸編む灯影に冬がしのびより
金持ちで無いから隣と馬が合い

岸和田市 島崎富志子

自惚れた耳は意見を通りぬけ
いばつてる夫のひもの先を持つ
半額につられて無駄も買う甘さ
静けさに負けてベットと話す

岸和田市 古野ひで

古いぬれば姉妹たがいにあじあい
風化した積りの過去が疼き出し

旅がえりひとり暮しに灯をともし
枯淡とはこんなことかと慾がない

岸和田市

狭間 希久志

同情が種火怪しく燃えさせる

袴は着たが袴をつけ忘れ

就職が墓洗う気にさせたのか

善人は頼みもせぬに本音吐き

岸和田市

福島 せつ子

教え子が子を連れて来るうれしい日

耐えている女が叩く干かれい

待ちに待つ家族みんなで秋の旅

針箱の針が光り出す昨日今日

岸和田市

清野 こう

ロマンスを秘めて美人の母でした

婿養子父の形見の硯箱

友情をつなぐ賀状に出す硯

美人ではないが心の清いひと

松江市

梅本 登美也

釣り針をぐつと呑みこむ嫁きおくれ

行革がふつと福祉をおびやかし

白鳥の飛来乏しく秋深む

出戻ってふつと我が身の置きどころ

島根県

谷岡 芳枝

秋しぐれ茶の間で泣く人笑う人

英霊をまた喰いものにしはせぬか
彼岸花ひとり芝居の日が落ちる
柿一つ夕陽に色を頂きぬ

岡山県

萩野 鮫虎狼

資金オーケー僕の嫁さんまだ来ない
娘盗られて寿の酒という

口ひげが立派に伸びて職が無い

道連れの女闇夜によくしゃべり

松原市

北野 久子

ちよこまんと亡母が居るよな障子見る
同居しても老後の事は言い切れず
まだ嫁かず男あるよに見られてる

外見は苦の無い顔で音が無い

枚方市

水野 弘

宝くじ今年最後の夢を買い
もう一びきもう一びきで湖畔暮れ
一匹が釣れて隣りも喫うゆとり

ボート漕ぐ二つの心は一直線

枚方市

稲葉 星斗

喜びも悲しみも消え最終船
白雲悠悠静かにひとり糸を垂れ
鯉釣れば三十石の舟が見え

欲ばって訪ねる社寺に秋暮れる

西宮市

野呂 鶴汀

その中のひとり無口の恐ろしさ
山の色一つの色にこだわらず

女の性産む苦しみを又忘れ
北風に枯葉追ひ越し追ひ越され

出雲市 石倉 芙佐子

人間に付ける鎖は銀の色

お立ち酒神様ひとり乗りおくれ

振り出しに戻る双六して遊ぶ

栄光の道を選んだ男の打算

岡山県 岩道 博友

風邪引きと知らず隣りへ席を取り

話し合い出来ても蔭で女愚痴

紋入りの幕まで張って見せる気か

お見舞に行けば珍客らしく言い

出雲市 園山 多賀子

気の染まぬ対話しきりに眼鏡拭く

老斑が肌の年季を問いかける

自分だけ納得主語のない話

漬物の重石も偶偶無叛する

和歌山市 杉田 周穂

散歩には適度な距離に城がある

大回り散歩閉ざした美術館

葉湯のいつも匂うて散歩道

欠席の葉書御中書き足して

鳥取市 森田 熊生

初心もう忘れて見栄と肩を組み

もう一人来てから意見くいちがいがい

反対の反対耳が冷えてくる

名を捨ててからの歩幅が実を結び

藤井寺市 中原 比呂志

おめでとう交しライバル意識もつ

三ヶ日人間愛が満ち溢れ

除夜の鐘精算主義者へかりたてる

冬に咲く花で気負いなどもため

玉野市 小谷 仙山

大風呂敷広げて包む物がない

すいも甘いも噛みしめて見るみかん狩

椅子の位置少し狂えば少しもめ

一生の途中で釘が折れ曲がり

京都市 松川 杜的

山茶花の落花を除けて庭箒木

五百羅漢彫れば私の顔にする

黄菊白菊元氣な祖母が居てくれる

一合を二人で飲んで今日終る

東大阪市 竹中 綾珠

足音に膝の子猫が耳を立て

来年の運勢気になり暦買う

サントリーオールド主人が逝って棚ざらし

意気地ない男にもある妻子愛

大阪市 柳原 静香

菊の香が満ちて近づく誕生日

もみじ色に染めて今日の日記閉す

初春の旅決めて心をなごませる

町の名が変わってふる里遠くなる

羽曳野市 榎本吐来

本好きな子に金運は期待せず

昨日迄の続きを生きる髭を剃る

ポーナスは埋めるものと決めている

小さい見栄背負う律気な影法師

鳥取市 小林由多香

気前よく振舞い赤字のぞかせず

ローカル線リンゴたわわにゆれている

赤ん坊の握りこぶしに欲はない

母の手へ豆腐素直に賽となる

下関市 国弘半休門

初詣で年寄り組は期をずらし

歳末のくじが当った初詣で

七十七の根性だから出し渋る

喜寿の春ハツケヨイヤで後がない

松江市 柳楽鶴丸

馬鹿の親でも秀才育つかも

女の熟年は葡萄酒

トットちゃんを見習いなさい落ちこぼれ

マンネリが歩くと小石でも転ぶ

倉敷市 小幡里風

負けて勝つその日静かな血の流れ

祝勝会敵が味方の中に居る

少し酒女が本性吐きました

再会の涙抱き合う肩がある

七尾市 松高秀峰

看護婦に叱られる程全快し

厄年の試練今年も続きそう

七転び八起き五十の坂を越え

ボンコツの様に齒からガタが来る

大東市 土岐トク子

与え合う愛深淺の夫婦愛

はてしなく人生の道車椅子

献体の尊厳説き子等皆OK

美しいことば贈られ祝い酒

大阪市 清水健司

三十五年生きねばならぬ手術室

針まわる只祈るのみ手術室

手術室なにも出来ない十時間

十時間よくぞたえたり青い顔

島根県 小砂白汀

けんめいな歩巾自嘲に念を押す

SLが走ると過疎がよみがえる

雑兵は動くことから年が明け

落ちこぼれ拾うて鳩が太りすぎ

八尾市 飯田悦郎

恋人に秋が写った赤トンボ

愛想よい男が店のアルバイト

お化粧が上手で哀しい女なり

戸籍上消えても里子にある絆

愛と云う文字温める古日記
鳥取県 清水一保

愛と情菊花存分吸うて咲き

フアイトだけ抱いて満たされぬ月日

天命と云うから抵抗して見たい

岡山県

直原 七面山

こともあろうに癌に見込まれる

陽炎の向うに歪んで立つ二人

貸衣裳を脱いで心の荷を降ろし

千羽鶴を折り終えた日に少女逝き

大阪府

藤田 頂留子

九官鳥口止料は何がよい

相変りませぬが目出度いテレビ見る

何事も忍是佛心やなぎ風

五六時間眠って目出度い顔で起き

寢屋川市

宮尾 あいき

子は独り私も独り母子草

祖母ちゃん来るからお豆腐買いにいく

待ち呆け慰め顔を木の葉舞う

葉鶏頭なんぼ炎えても蜂も来ず

唐津市

新岡 回天子

半世紀続けたことが文化賞

新築の家文化賞も共に受け

市街四分の三は眺めの中にある我家

ちようぼうは家のうちより見ゆる景

阿鼻叫喚小児科午前十一時

同居して孤独がほしい旅に出る

神戸市

仲 どんたく

嘘つかぬ鏡へ嘘をついて見る
三代の襲名梨園の血を断たず

島根県

西村 早苗

水溜りの枯れ葉を冬の瞳で掬う

疑いはもたずお守り授かりて

無口なる男が洩らす酒の量

人妻の素顔をほめている邪念

竹原市

時 広 一路

誕生日めでためたのお元日

明日の日は笑い合いたい今日の嘘

枕木の辞職願いは預かられ

面を手にして善人思案する

生駒市

草 深 醉 升

飲むよりは外なし老妻の三回忌

もう愚痴は言わぬ言わぬとそれが愚痴

そのうちに折れて来るよと年の功

お百度を踏んでありつく飯うまし

倉敷市

藤 井 春日

脱サラの思いついたはラーメン屋

喜寿の心の奥にまだ母は生きている

貧しくも愛の温もり分ち合い

幸福と云う荷を持って娘嫁き

松山市

谷 真 風

独り居る破れ障子を繕うて

街路樹が散るちる愚痴になりそうなる
新聞の運勢欄に励まされ

ひとり居るさびしき故にひとりいる

鳥取県

鈴木村諷子

井という字は誰が考えた

五つ子の母にも乳房二つだけ

どちらからみても媚びてる菊の花

この出逢い盲亀の浮木かも知れぬ

柏原市

大峠可動

一月の酒は特級雲に乗る

父老えり母老えり愛濃くせねば

凡人の逆転した日鳴くカラス

人間を描くと父の顔になる

島根県

梅みどり

罪一つおとして帰る寺の鐘

一言へ合わせて暮らす灯を守る

秋深む心せわしく灯をともし

菊かおる亡夫の忌めぐる小六月

神戸市

中村ゆきを

奪い合いなんてしないよ知恵おくれ

トンカツと刺身が好きなうちの犬

主賓席だあれもビール注ぎに来ず

敷革を入れて子供古を履き

大阪市

西川善紫

孫が来て話の腰を折られたり

おいそれと引つ掛るほど甘くない

野良犬かて通り抜けよう法善寺

妻が来て話題を変えた電話口

熊野市 坪田冬花

真夜中にふと胃袋が目を覚す

御見舞にきて生きること喜ばれ

八ミリへやつと捕らえた子の笑顔

子の事になればレールも見あたらず

岡山市

川端柳子

雑念を払うもみじは燃えており

過去は皆流した筈が又よどみ

白菊の香り大事に人を守つ

我をおもい人をおもうて夜もすがら

大阪市

横地雅風

まだ行かぬ海外旅行孫が行き

ママの手に碁盤目豆腐のうまい朝

山頂は明日だと深夜を食べためる

祈りもう忘れた足でエアポート

東大阪市

崎山美子

ネクタイの好みがかわつて来た噂

七人の敵むかえうつネクタイで

ネクタイをとれば無防備になる男

逃げ道のない人生と四ツに組む

町田市

竹内紫鏡

日進月歩から休みたい古典趣味

クイックもみせて仕止めた逆探知

樓門で消火システムこの通り

非常口告げて司会者やぼでなし

和歌山市

垂井千寿子

群集を犯すカメラの目が怖い
妥協するチャンスはお金に助けられ
数珠を持つ半分善人らしい顔
忘却の彩はワインの底に溜め

和歌山市

内芝 登志代

老眼鏡かけて和顔愛語の顔となる
ほどほどの嫁で気兼ねのないくらし
何となくうきうきしてくる恋かしら
刻まれた歴史がゆとりの老母となる

和歌山市

坂口 公子

渦巻の中は可愛い恋でした
心情を吐露してパントマイムの背
夫の背に今日の天気を書いてある
寺庭の秋が見せてるねはん絵図

島根県

大森 孝華

雨をきくゆとりになつて共白髪
金策へつめたい風に背をおされ
手にあまる話を拾う母がある
老友の後姿が目に残り

貝塚市

行天 千代

今日だけを信じて生きた夜の膳
張りのない手足見つめて古稀も過ぎ
少しでは足りぬお見舞六人部屋
葉漬け今年も聞けた除夜の鐘

大阪市

室谷 徹舟

蒼い空紅葉の柄よ吾妻山

コシヒカリ押すな押すなの黄金色
秋祭り車を止めて派手になり
無職から見れば労組甘えてる

海南市

牛尾 緑楼

もうひとつ自分がほしくなる正義
など言つて女グラスを満たして
さし伸べる手に母親のエゴがある
年月を越えて二人にある語り

檀原市

岩井 本蔭棒

惜しい枝ばかりで鉄はかどらず
黙々と肉ばかりを狙う箸
娘とて聞けない事が一つある
若人に割る薪も汲む水も無し

加賀市

細呂木 魯木

役員も使いすて辞任を強いている
魂が胃袋にあるらしい私
カルテだけ残して涙で見送られ
握手の蔭に夜叉あり菩薩あり

兵庫県

大江 秋月

肩の荷を茶の間で下ろす宮仕え
香水をつけた男に金が無い
騙されて見よう失業中だから
家中をの字になつて風邪が舞う

和泉市

西岡 洛醉

皆無言人間ドック順を待つ
まず大丈夫人間ドック酒が飲め

今日からの牛歩堅実主義を積む
主婦の座もがっちり老眼鏡光る

仙台市 川村 映輝

富める国老若男女よく太り
願望が強く叶えてくれた夢

足るを知り年金ぐらし又楽し
交代にエプロン掛ける共稼ぎ

姫路市 大原 葉香

夜光虫航路の末練となり光る

戸締まりをして今日の幸逃すまじ
葉つ葉服着る人生が待っており

身障の膚に寒波が来る予報

高知県 松岡 三吉

決断のいる松茸は見て帰り

森がないビルが建つて渡り鳥
新鮮な空気を吸っている孤独

外食の一家メニューの皆違い

高知県 赤川 菊野

気に染まぬ縁談編目をまた落し
逢えばまた迷いが残る法善寺

坊さんと馴染になった不幸せ
故郷の海が聞える祭り笛

米子市

石垣 花子

三面鏡薄い毛ならべる百面相

赤電話待たせながらもよく喋り
相好をくずして孫の馬になり

米子市 青戸 田鶴

みほとけへ深い祈りの石の坂
びん型に沖繩の血を染め上げる

盛り場で鎧戸下りたままの店
旅先の雑踏受話器からこぼれ

米子市 政岡 日枝子

雪しんく夫の浮気もやや下火
吉報につながる裏で動く金

朝一人夕べも一人の米をとぐ
朝の雨不倫の出足にぶらせる

米子市 桑原 伊都

来賓の祝辞が続く座がしらけ
一日が長い新聞休刊日

嫁いだ娘今日はお客の座へ迎え
半額の切符も痛い子沢山

米子市 雑賀 美世

満ち足りた顔で天寿を終えた亡父
盛り場で意気投合の落ちこぼれ

左遷地へ母の荷物が追うて着き
もみじ一葉障子に入れた亡母を恋い

米子市 菅井 とも子

内緒話聞えて受話器持ち直し
脇道へそれた話題に花が咲き

定退も無くて気ままな妻の椅子
しみんと「戦友」うたう夫も老い

京都市 山本 桐下

別居した子に厄除けを買う夫婦

日記帳温める新春の訪問者

紋付に敬語で喜劇の三ヶ日

賀状来る皆んな生きてる顔でくる

大阪市

河井庸佑

人助けする方便と言いきかせ

下積みの苦勞報いる日を信じ

一言のせりふがうれし初舞台

和歌山市

若宮武雄

瓢々と生きて浮草溺れない

まっすぐな背筋に見せている自信

御利益を疑う勿れという仁王

大田市

藤田軒太樓

静思する仏間法会の人となり

安産を祈る夜明けの窓しらむ

參觀日母を認めた子の微笑

出雲市

板垣夢酔

娘に嫁に疎まれこんどは妻にまで

おでん屋でポーナス景氣聞いて来る

おめでたと言われまごつく不倫の子

出雲市

吉岡きみえ

手のひらに抜毛まるめて秋深かむ

人妻となる夜の星がすこしゆれ

小菊には小菊の役で花を生け

大阪市

岡田ふみ

善光寺電車の中から拝んどく

硫黄の香早々退散白根山

冬仕度着ぶくれている草津の湯

宇部市

平田実男

飲ませたら自白たやすいなど思う

あれからは妻に言えないことが増え

切開の跡も見せてる内祝い

大阪市

神田秀峰

前よぎる女に男が道譲り

人間の欲神様へ手を叩き

役得へ贈答品の庫が建ち

岡山市

井上柳五郎

形見分け亡父の日記を持ち帰り

奇祭だけ残し門前町さびれ

開発にふるさと歴史蝕まれ

羽咋市

三宅ろ亭

鉄瓶の湯気と対話の楽隠居

柿の葉のジュウタン敷いて過疎の家

恋愛は下手な息子が嫁決めず

松山市

竹内寿美

柿すだれ残り少い秋陽溜め

精進場紅葉の紅がそのままに

原発に反対若者の目を愛す

河内長野市

井上喜醉

喜ばれ嫌われて妻そこにいる

国会の平和年末もう近い

お決りの客が揃ってママの守り

若柳潮花

琴爪を菊の茶席へ置き忘れ
真実がくすぶり噂派手に燃え
七回忌すめば添わせて欲しいひと
土に去ぬ紅葉は燃えるだけ燃えて
地獄まで落ちたらそこで昼寝する

月原宵明

懐炉抱いてまでもゴルフに行きたがり
荒れはてた指握られた過去がない
冬眠の蛙の夢は青い国
誰とでも握りたくなる選挙の掌
心境の変化一そうケチにする

本田恵二朗

老妻の歳事記に休暇見当らず
周波数がそれぞれ違う核家族

青くさい鼻息につこり聞いてやり
守備範囲広げる意欲いつか消え
古典的案山子雀にみくびられ

黒川紫香

うどん屋で売ってた頃の風邪薬
冬の風いつも隙間を探しに来
爽やかな嘘反論もせずに聞く
往診の医者が布団を掛けてくれ
三次会そこで茶漬を喰べて去に

正本水客

甲斐路

風林火山の旗のまぼろし甲斐に富士
武田三代つつじが崎に燃える秋
重みに耐えて菩提梯てう二八七段(身延山)
ここにも此処にも信玄の隠し湯という慕情
野呂川源流秋の限りの色を持つ

尼 緑之助

晩秋や雌蜂が刺したハプニング
秋さなか犬と散歩の濃愁女
孫帰るこそこそ音して台所
開発の土の中なるけらの城
栗一つ落ち白秋の赤トンボ

浜 田 久米雄

表札は亡夫の名前をまだ残り
バインダーことし孫娘に頼み
生き延びた爪が正月から切られ
廃止する線かや乗降客がなし
金婚の準備いま頃から始め

若 本 多久志

老いは古い命かぎりの箸をとる
若者の所作微笑んでみるゆとり

義理を欠くこと多くなり老いを知る
思い遣りそんな言葉が嬉しくて
その度にこれが最後の旅日記

長 野 文 庫

食べながらやせる本買うやせた人
口下手だから信用をしてくれる
檀山を真近かに仰ぐ胸さわぎ
何となくひっかかりのある軍手の字
読み書きは好かぬ女の長電話

大 坂 形 水

元旦だ犬の鎖を外したる
正月の広場に犬もボール追う
押し売りが来ても尾を振るうちの犬
正月を退屈そうに居る老犬
80年代やっぱりえらい女出る

川柳 太平記 (44)

古島一雄と正岡子規

東野大八

いよいよ明治川柳の開幕だが、久良伎、剣花坊、そして子規の短詩文芸創生期の足どりを描く前に、この三者に対し大きな存在感を示した古島一雄のことに触れたい。

まず明治開化期の背景だが、江戸期から明治維新に至る首都江戸から東京への移り変わりに眼を向けおく必要がある。狂句に――

―売家だらけ風呂のたきぎに事欠かず

江戸市中を直参を誇り、庶民をないがしろに闊歩した旗本連も幕府瓦解と共に忽ち食禄を離れ、駿河、遠江、三河の割当地に移住したものの三万余人。引越しにも交通の便無く高価な刀、書画骨董は二束三文に売りに出され

辺では土蔵・表長屋抱き合せでたった十両。さりとしてそのままだと地税をとられるので酒一升つけてただで引取って貰う者が続出した。政府はこのため、サムライ屋敷はすべてとりこわし桑や茶の栽培を奨励したが、明治五年ジャガ芋の方が利益になるとこれを中止。―花のお江戸に桑茶を植えて、くわ(食む)でいるとは人を茶にチヨイト チヨイト

―士農かのどうしようのうと工商と、いう分別もつかぬ世の中

かつて大江戸八百八町を謳歌した江戸百万都市も、明治三年の調べでは七十七万五千人で廃藩置県、廃刀令の施行のため一挙に五、六十万人の人間が激減した。

慶応が明治と改元されたのは明治四年(一

八七一)九月八日で、この年号は「聖人南面聽天下嚮明治」の漢詩からとった。

―上からは明治だなどというけれど、治まる明(おさまるめえ)と下からは読む

江戸が東京と改ったのは慶応四年(一八六八)七月十七日である。

―上方のぜいろくどもがやってきて、東京とんきょう(頓狂)などと江戸をなしけり

明治も十年頃までには、文学の白色期間であった。無理もない話で、この十年間は日本歴史に類例のない一大激動期にさらされ、実は文学どころではなかった。明治維新、王政復古は奇妙キテレッツな和洋混合をきたし、文学は化政期の洒落本、読本の残滓に頼った。

梅亭金鷲、柳水亭種清、仮名垣魯文、山々亭有人などの連中が、ラチもない江戸町人文芸を細々と支えていたに過ぎない。こうした世情の時代の一大転換期に活力を示したものは絵入り雑誌や、木版刷新聞のいわばマスコミの先駆とみられる出版物だった。

さて言論人古島一雄の登場だが、彼の生家は但馬豊岡藩の勘定奉行で、父親玄三は宝蔵院流のヤリの達人。備中岡山の出身で、犬養毅とは同郷。明治二十五年古島は日本新聞の記者として犬養にインタビューした際、犬養

の人格と識見に感銘し、これが縁で彼は終世犬養一辺倒で尽瘁した。カゲになり日向になり犬養に傾倒し続けた彼は、大正十三年、犬養が加藤高明内閣の通信大臣になったとき、古島ははじめて政務次官の要職についたが

「大きいことは木堂(犬養の号)にきいてくれ。小さいことは植原の悦(植原悦二郎)が知つとる。オレは何も知らん」

とつぶさいて大きな回転椅子にクツのままあぐらをかいていた。利権屋撃退が彼の役目だった。終戦直後、幣原内閣の副総理に迎えられたが、老人の出る幕ではないと断る。

古島がジャーナリストの初手は、恩師杉浦重剛の世話で雑誌「日本人」の記者がふり出し。然し古島が入社したとき、志賀重昂が主筆で、二十五歳の古島よりわずかに二歳の年長だが、新米なので雑役に使おうとしたので

「オレは記者で入社したんだ。雑役夫ではないぞ」

とつぶさね、やがて東京電報新聞(のちの日本新聞)に入社。社長は陸羯南(くがかつな)である。時に社内には三浦観樹、谷千城、国分青崖、池辺三山、福本日南等の一騎当千の反主流、反骨のクセものがそろっていた。

この社は政治・教育が主眼で、経済面は商

況と物価表を出すだけ。三面記事を閉め出し広告など眼中にない。知識階級を相手とした清潔、高邁な新聞で、当時の明治書生は日本新聞の読者であることを誇りとした。

古島は日本新聞入社のと、古一念と号し終生これを用いた。一念こめて文章報国に当るという気概のものだが、毒舌家の国分青崖は「吉原遊廓に一念をささげたからだろう」と冷やかしている。

明治維新ころの新聞は、すべて木版印刷でしめて十四種だった。明治二年二月、新聞紙印行条令八カ条が布告されたあと、本木貞三らが活字鑄造を發明し、活字版の「横浜新聞」を創刊した。これがわが国の日刊新聞の草分けである。間もなく郵便制度が設けられ新聞紙は特待されたため、日刊新聞が続出し、四年に京都新聞、五年に名古屋新聞、紀州日記新聞等の地方紙が出た。地元東京では五年に東京日日、六年に郵便報知、このあと朝野、曙などが現れたが、日本新聞はずっと遅れて明治二十二年二月に創刊、同四十年に廃刊した。

日本新聞在職中、古島の果たした役割で見逃せぬ事の一つは正岡子規を起用したことである。創刊早々に面接試験の際、子規は

「私は肺病で前途が短いからせむい入社させて下さい。帝大などで道草を食つてる暇はありません。私の目標は俳句の革新です」

と言った。青白い顔に紺がすりのこの青年に

「面白い奴だ!」

と古島は感心した。東大を出て立身出世を望む青年の多かった当時、俳句の革新に生命を捧げるとは見上げた男だというわけである。

惚れたとなるとトコトンまでつきあうのが古島の性分である。重要紙面の二面下段を子規に解放して一切無干渉、好きなようにやらせた。かくて子規は「かけはしの記」「癡祭書屋俳話」「文学漫画」等の俳壇も設けた。こから高浜虚子、河東碧梧桐、内藤鳴雪が育ち、その俳句革新が一段落すると、子規は短歌革新に移り「歌よみに与つる書」十篇を連載し、後年日本短歌界を担う香取秀真、長塚節、伊藤左千夫らの俊英を育てた。短歌革新は子規病中で、執筆は根岸の居宅で続け、歌会も持ったところから、世に根岸派という。

この俳句と短歌革新のはざまの明治二十九年、阪井久良岐が入社し、歌道をめぐる子規対久良岐の確執の一幕があり、同三十五年井上剣花坊が入社し、川柳界初の新聞柳壇を日本新聞に同三十六年に開設するのである。

誹風柳多留廿六篇研究

(四丁～五丁)

小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
石田晋一・南 得二・多田 光

故岡田 甫

71 馬狩りとてうかう触れを廻す也

南||『史記』、秦二世皇帝の時、丞相になつた趙高が、己が權勢をはかるため、鹿を馬と偽つて献上し、不審がる二世をして左右の侍臣に問わせた。「馬に相違ございませんと趙高におもねるもの、或は黙るもの、「鹿でございませ」と正当に反事したももの等、まぢまぢであつたが、趙高はひそかに鹿と言つた連中を罪におとし処刑したので、この後群臣皆畏れて趙高の命に従つたといふ故事あり。本句は右の故事に従つて鹿狩りを馬狩りと趙高は触れを廻したてあろうとの想像句。

鹿をどうく〜とひくばからしき

一三・10

秦の代に鹿のいななくとんだ事

四四・3

本多||狩獵に「馬狩り」などは行われなかつたから、上五「馬狩り」は皮肉たつぷり。

多田||贊。

岡田||同。



五丁

72 蚩蠶そばに史記だの左伝だの

小野||『史記』二十四史(中国の正史の総称)

の一。黄帝から前漢の武帝までの事を記した
もの。漢の司馬遷著。「左伝」は春秋左氏伝
の略。春秋(五経の二)の注釈書。左丘明の
作と伝える。

車胤が蚩を集めて、その光で書を読んだと
いふ故事をよんだもの。

蚩のそばに論語だの孟子だの

四七・10

註を読む時に蚩はゆすぶられ

三九・35

本多||贊。

冬の夜ハ車胤よまずに寝て仕廻イ

八六・8

多田||贊。

夜学でも胸ハあかるき夏と冬 五六・7
蛍雪の窓で明るい文の道 五四・2

岡田二贊。

73 かい名を鳥に聞かせて放す也

小野二 放生会にて、この人の後生を願つてくれよと鳥に戒名を聞かせて放すのである。放生会とは金光明経流水長者の故事に基づいて捕えられた生類を買い集めて放ちやる儀式にて、神社仏寺で陰曆八月十五日に行われる。鳥の他に亀や鱉、鯉なども放たれた。

があさく 籠に五六羽はなし鳥

傍五・18

亀の耳へ念仏ポチャンと放し

一三五・14

多田二贊。

岡田二同。

74 人程にしぼって入れる花の琴

小野二 一般庶民なら、お花見も木の下にござなど敷いて安直に出来ようが、身分ある人ではさうもゆかず、

花の山御幕一ト重の取りメリ 二八・16

の如く、人目をさけるために幕をはりめぐらす。その幕を、余り内が見えないように人一

人通れる程にしぼって琴を運び入れる。

爪音のするは古風な花見なり

一一・ス9

石田成二 贊。そこで雨が降つて来ると

花の雨琴しんまくにおへぬなり

二二・28

多田二 贊。

岡田二 この句、難解の一。礎稿、よく解かれました。

75 放生会ぬくめた方を鷹ハ見す

小野二 『川柳年中行事』の註に曰く、「隼は小鳥を捕えて足を暖ため、朝にこれをゆるす。其の鳥の飛んで行った方へは、其一日餌をとりにゆかぬとある」と。

鷹がぬくめ鳥の後を追わぬというのは、とりもおさず、鷹にとつての放生会である、という意。

八木二 贊。鷹が小鳥を放つ、それを放生会に見立てたのであろう。

多田二 贊。

岡田二 同。

76 三井寺や比良を服紗に嬬直し

小野二 三井寺・比良何れも近江八景の一であ

り、近江縞にたとえたもの。つまり、古くなつた近江縞(染ちりめん)をほどいて服紗に縫い直す。

本多二 『三井寺や比良』は浜縮緬のきかせもあるが、着物の裾模様であらう。ここでは近江産の絹布や縮緬と限定しなくてもよいであらう。

八景が嫁のふくさニちつと見え

二九・25

三井寺や瀬田を服紗に嫁こさへ

六一・34

八木二 娘時代は振袖を着るが、嫁に行くとき袖を留める。袖の下の方を切る。そこに模様がある。三井寺や比良、近江八景の模様だったのであろう。生地は浜ちりめんのきかせがあるかも知れない。切り取つた部分で服紗、時には風呂敷を作るのである。

多田二 着物のことがよくわからず、八木氏説の「切つた袖」の模様のついている部分を利用するのか、振袖そのものの裾模様を利用するのか断定しがたい。

岡田二 諸説に尽きる。娘の袖留した折りに切つた部分で作つたフクサ。ビワ湖東の小浜は今なお小浜チリメンの産地。



同人句集

私の一句

百までは生きる気孫に屠蘇を酌ぎ
 何くわぬ貌で止まっていた時計
 繫がれた犬を野良犬見て通り
 満願へ星がゆつくり降りてくる
 肩ぐるまするつながりもありぬべし
 恍惚となつても妻は妻である
 寺の鐘過疎のリズムに合つて鳴り
 満洲国歌が歌える余技を秘めて老い
 胸を張る男に幸せついでくる
 昨日よりきれいな顔で目をさます
 歩幅の差時々妻をふり返り
 花束を受けて今日から姑となる
 晩鐘が心の芥吸うていく
 男から女のいくさ面白い

| | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 富田林市 | 大阪市 | 高知県 | 東大阪市 | 倉敷市 | 枚方市 | 鳥取市 | 今治市 | 藤井寺市 | 八尾市 | 西宮市 | 大阪市 | 竹原市 | 大阪市 |
| 岩田 | 坂口 | 赤川 | 市場 | 小野 | 水野 | 河村 | 長野 | 笠原 | 高杉 | 杉浦 | 川口 | 山内 | 中島 |
| 美子 | 公野 | 菊野 | 没食 | 克枝 | 弘 | 日 | 文 | 吸 | 鬼 | 美 | 弘 | 静 | 々 |
| 代 | 子 | 野 | 子 | 枝 | 弘 | 満 | 庫 | 江 | 遊 | 子 | 生 | 水 | 庵 |

(到着順)



生きるため無難な中間色を撰り
 葉わさびの辛さおだてに乗り易し
 勝運の髭そり落す嬉しい日
 見舞客の前では痛んだことがない
 愚痴貯める手頃な壺を夫が撰る
 峰と峰やがて戦は終るだろう
 千羽目の鶴告白を避けて舞う
 なわとびの出来た自信を忘れない
 聴えない悲しみはなし花時計
 お姑へ笑い薬を考える
 平凡な影は夫婦の安らぎか
 公印を押せば文書が威張り出し
 一字ずつ罪消す様に摩訶般若
 ポインタ―許せまたもや撃ち損ね
 無駄話そんなゆとりも有ってよし
 歩調トレノと云いたいようなブーツ来る
 元旦の心四恩をかみしめる
 蠟燭が停電嗤っている文化
 窓際に大先輩といい言葉
 人口が倍ほどになり過疎の新春

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| 高知市 | 和歌山県 大阪府 | 青森市 | 京都市 | 大阪市 | 出雲市 | 守口市 | 姫路市 | 美祿市 | 松原市 | 大阪市 | 大阪市 | 和歌山県 大阪府 | 富田林市 | 出雲市 | 宝塚市 | 岡山市 | 島根県 | 今治市 | |
| 川 | 横 | 中 | 工 | 松 | 欄 | 原 | 野 | 大 | 安 | 北 | 柳 | 小 | 松 | 板 | 園 | 傍 | 井 | 小 | 月 |
| 竹 | 地 | 根 | 藤 | 川 | | 呂 | 原 | 平 | 野 | 原 | 出 | 原 | 尾 | 山 | 島 | 上 | 砂 | 原 | 宵 |
| 松 | 雅 | 勇 | 甲 | 杜 | 独 | 右 | 葉 | 弘 | 久 | 静 | 智 | 寿 | 岳 | 賀 | 静 | 五 | 白 | 明 | |
| 風 | 風 | 太 | 吉 | 的 | 蘭 | 仙 | 近 | 香 | 道 | 子 | 香 | 子 | 子 | 人 | 子 | 馬 | 郎 | 汀 | 明 |



演習地蝶が来るとは大胆な
 うれしくも吾子にかぶとをぬがされる
 十指みな強い絆を知っている
 言いすぎて花の散るのを待っている
 恐いから医者へ行くのは明日にする
 老兵の思い出ちぎれ雲に似て
 ピストルの弾丸はいつも母が抜く
 山出しの蘭虎斑を抱いて生れ
 夢持たず寝正月
 闇討ちをかけて男の名を捨てる
 軍靴の音耳鳴りとなりニュース
 小さい愛神を信じていて平和
 結ばれたえにしの深さ姑を見る
 さくら草恋知り初めた手に抱かれ
 ほどほどに意見も添えて丸く老い
 情熱がさめて夢見たことにする
 ああ平和水盃は伏せてある
 墓参りとなりは洋酒好きらしい
 間隔おいて捨て犬ついでくる
 六十の命に月が冴えわたる

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|------|------|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 富田林市 | 大阪市 | 富田林市 | 和歌山市 | 堺市 | 米子市 | 堺市 | 米子市 | 岡山県 | 岡山県 | 桜井市 | 岡山県 | 熊野市 | 八尾市 | 大田市 | 大阪市 | 大阪市 | 和歌山市 | 大阪市 | 大阪市 |
| 藤岡 | 大坂 | 阿部 | 福本 | 高橋 | 菅井 | 大道 | 青戸 | 岩道 | 浜野 | 河合 | 直原 | 坪田 | 宮西 | 藤田 | 北野 | 河野 | 内芝 | 西出 | 西森 |
| 花形 | 水太 | 柳英 | 千子 | 万子 | 乙子 | 鶴友 | 田博 | 奇童 | 茂雄 | 七面 | 冬花 | 弥生 | 軒太 | 勝美 | 君子 | 登志 | 楓代 | 楽村 | 花村 |



突然に向う岸から来る波紋
 定年の拍手を妻と子にもらう
 孫がいて対話の種を蒔いてくれ
 敗戦のどこかで眺めた赤トンボ
 姉妹がおんなじ人を視野に置く
 蚊取りマツト虫も殺さぬ薫りして
 疵つけずつけられたくもない無口
 わだかまり消して仰いだ流れ星
 千人針縫うた日もある糸切歯
 とつくりが転んだように父が寝る
 漬物の石です己をわきまえる
 返せないご恩一ぱい世間様
 父の知恵らしく見せてる母の知恵
 鮮やかな視野回想の名場面
 袋小路と知らず選んだ道を行く
 黙殺という手もあつた言わせとけ
 吹き抜けた風は五十の坂を越え
 無一物無尽蔵落葉しきりなり
 ニッポンの歴史の中の二等兵
 好奇の目を網にかけてる女郎蜘蛛

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|-------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|-------|------|
| 加賀市 | 岡山市 | 守口市 | 出雲市 | 鳥取県 | 米子市 | 岡山市 | 大阪市 | 大阪市 | 鳥取県 | 高知県 | 富田林市 | 大阪市 | 和歌山市 | 寝屋川市 | 松江市 | 岸和田市 | 島根県 | 桜井市 | 米子市 |
| 細呂木魯木 | 鈴木九坡 | 羽原静歩 | 石倉美佐子 | 林露杖 | 桑原伊都 | 川端柳子 | 岡田ふみ | 西川善紫 | 川崎秋女 | 松岡三吉 | 中村優 | 黒田真砂 | 若宮武雄 | 宮尾あいき | 梅本登美也 | 福浦勝晴 | 山根峰雪 | 岩本雀踊子 | 雑貨美世 |



幕間の五分にかけの釘の音
 真心が籠れば変る墨の色
 定退のその後を訪ねて見なくなる
 ひとり歩いてひとり帰って来てひとり
 非常口と書いて鍵がかけてある
 狂えずに翔べずに今日も鳩時計
 音消して反省多き日記書く
 星空へ力のこもるにぎりめし
 おもちや箱毀す大きな秋の音
 大臣賞記念の時計にある苦勞
 それぞれに一日があり人の波
 職安でノータイ同士がよく出逢い
 叱られた様に叱って焚火かな
 熟年や妙におしゃれをしたくなる
 覚悟して出れば冬陽があたたかい
 平均年これからおまけ温めたい
 どの星も私を見てる歩まねば
 ガス一発寢床さわやかな寢ざめ
 結局は夫婦二人となる覚悟
 ヤングも俺をオジンとぬかしやがる

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|------|-----|------|-----|-----|------|-------|------|
| 守口市 | 岸和田市 | 柳井市 | 大阪市 | 鳥取県 | 大阪市 | 和歌山市 | 奈良県 | 枚方市 | 和泉市 | 七尾市 | 富田林市 | 岸和田市 | 鳥取市 | 和歌山市 | 岡山県 | 松山市 | 岸和田市 | 河内長野市 | 東大阪市 |
| 村島 | 弘津 | 神夏 | 金川 | 本間 | 野村 | 村上 | 稲葉 | 西岡 | 松高 | 和田 | 高橋 | 小林 | 西山 | 横山 | 谷山 | 植山 | 井上 | 奥山 | 奥山 |
| 田崎 | 富柳 | 磯道 | 満満 | 満津 | 太茂 | 上春 | 葉星 | 岡洛 | 高秀 | 田維 | 橋操 | 山由 | 山一 | 真風 | 武助 | 喜山 | 喜山 | 喜山 | 喜山 |
| 瓢志 | 子慶 | 子春 | 子春 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 | 子津 |



忘れたい忘れたく無い亡夫の事
 よそののへ波は素直に語りかけ
 おだやかな言葉に苦勞耐えた味
 名の知れぬ花が誇りを持って咲き
 うつ向けば髪の薄さを指摘され
 隨筆を書いてあまえてみようかな
 勞働のいま叫ばねば風が止む
 春雨の中で木蓮座禪組む
 坂道の上り下りで違う汗
 日曜日妻のおしやべりはずみだし
 成人の子へ手をひいた日がだぶり
 春の陽に春の服着て逢いに行く
 八重に咲く花で実らぬ芯を持ち
 年金の裏づけがある菊づくり
 少々は薬とのめぬ妻に酌ぐ
 風吹けば風雨降れば雨の旅
 どのようには逃げても影はつきまとい
 閉じた眼の涙は悔いをまだ消せず
 小会社も生きねばならず交際費
 明けきれぬ街は汚れてなどいない

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|
| 竹原市 | 鳥取県 | 島根県 | 高槻市 | 岡山県 | 奈良市 | 東大阪市 | 鳥取市 | 松江市 | 岡山市 | 松原市 | 羽曳野市 | 京都市 | 柏原市 | 奈良市 | 西宮市 | 今治市 | 京都市 | 羽曳野市 | 東大阪市 |
| 時 | 小 | 西 | 若 | 嘉 | 宮 | 崎 | 岸 | 竹 | 時 | 玉 | 塩 | 都 | 大 | 森 | 野 | 越 | 山 | 榎 | 竹 |
| 広 | 西 | 村 | 柳 | 数 | 口 | 山 | 本 | 内 | 末 | 置 | 満 | 倉 | 峠 | 田 | 呂 | 智 | 本 | 本 | 中 |
| 一 | 雄 | 早 | 潮 | 代 | 笛 | 美 | 無 | 寿 | 一 | 重 | 求 | 可 | ズ | 鷄 | 一 | 不 | 吐 | 綾 | 珠 |
| 路 | 々 | 苗 | 花 | 賀 | 生 | 子 | 人 | 美 | 灯 | 人 | 敏 | 芽 | 動 | 工 | 汀 | 水 | 風 | 来 | 珠 |



手探りで行く人生に味が有り
 稜線をみつめて瘦せた指鳴らす
 胸に掌をあてても昨日は昨日なり
 明日はずす仮面へ核をたくわえる
 再就職肩がだんだん丸くなる
 巻く筈の竹へ逆らうつるもある
 スケッチの表紙に春の匂い描く
 こだわりが吹きとぶ朝のおはようさん
 二級酒でよし年金の酒の味
 健康はいいね朝飯二杯食べ
 風荒し青梅に似し青春を恋い
 ガス自殺出前の鉢を置いたまま
 木が痛がつている湖岸のコンクリート
 かげりある男のにおいに惑わされ
 自信作落ちて作句の腰くだけ
 まだ生きて欲し母九十にして手術
 銀盃を押し込んだも新聞売れている
 ミスリードした聞いて古稀の新
 難民群日本に八月十五日
 生々流転一片のいのち知る

倉吉市 奥谷弘朗
 米子市 八木千代
 大阪市 中川滋雀
 神戸市 仲川どんたく
 岡山県 荻野鮫虎
 松江市 恒松町紅
 岸和田市 福島せつ子
 岸和田市 原島さよ子
 岡山県 浜田久米雄
 兵庫県 大江秋月
 大阪市 天正千梢
 大阪市 黒川紫香
 尼崎市 正本水客
 大阪市 藤井春日
 倉敷市 行天千代
 貝塚市 野田素身郎
 倉敷市 草野田素身郎
 生駒市 草深醉升
 香川県 岡田拳法
 八尾市 大路美幸
 倉敷市 水粉千翁



両の手に触れる幸せだけは知る
 寝たふりと知っているから独り言
 気宇大に持てよと嗤う峰の風
 合歓の花母の乳房を焼いて来ぬ
 口笛で妻の愛唱歌をうたう
 土筆つむ孫に女の仕草見る
 妻だから言いたいだけを聞いてやる
 地獄絵の亡者の中に僕が居る
 群集が指一本にかくれたり
 それなりの苦勞があつて今日の椅子
 巡る四季素直に巡るそれもよし
 父母のいない故郷が遠くなる
 ひとり身を謳歌する日の旅かばん
 さざ波と遊ぶ佐渡から来たすずめ
 性知識 婦人雑誌がくどすぎる
 日蔭には咲いてもしつかと根をおろし
 定年の背中を時が押しつけてくる
 まだ俺の出番が来ない風の向き
 夕焼に城趾がロマン語りかけ
 てっちりや路郎門下の生き残り

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 八尾市 | 西宮市 | 松原市 | 堺市 | 大阪市 | 大阪市 | 八尾市 | 大阪市 | 岸和田市 | 大阪市 | 大阪市 | 鳥取県 | 福原市 | 藤井寺市 | 大阪市 | 海南市 | 豊中市 | 倉敷市 | 島根県 | 島根県 |
| 西尾 | 藤村 | 谷垣 | 藤井 | 西田 | 金井 | 香川 | 津守 | 清野 | 江城 | 河井 | 鈴木 | 岩井 | 児島 | 室谷 | 牛尾 | 橘高 | 稲田 | 堀江 | 堀江 |
| | 史 | 史 | 二 | 宏 | 文 | 醉 | 柳 | こ | 修 | 庸 | 村 | 本 | 与 | 徹 | 緑 | 薫 | 豊 | 芳 | 正 |
| 葉女 | 好 | 三 | 子 | 秋 | 々 | 伸 | う | 史 | 佑 | 子 | 棒 | 志 | 舟 | 楼 | 風 | 作 | 子 | 朗 | |

一人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西田 柳宏子

新年号の秀句鑑賞で先ずめでたく温かく、
九十だそうな畑に出るそうなの

河村 日満

どうぞいついまでもお元気に……。
平凡な日々夫婦の愛あふれ

奥谷 弘朗

平凡とは大変なことだと思ふ。平凡な日々
が何のてらいもなく夫婦の愛に支えられてい
る……素晴らしいことだと思ふ。

さてそれでは川柳のもつ人間臭さ、社会性
の句を拾ってみる。昨年は国際身障年でした。
鉛筆をきつちり削る身障児

黒川 紫香

真剣なまなざしで、全身で鉛筆を削っている
身障児が目映る。そしてきつちり削り上
った鉛筆を輝く瞳が見つめている。

仏壇で生き伸びていた秋の蚊よ

神夏磯 道子

須崎豆秋氏の長靴の中で暮っていた蚊の句
を思い出し、長靴で暮した夏の蚊が、仏壇で
生き延びていたことに面白いなと思ふ。

友だちに負けるとママの恥になる

高杉 鬼遊

もつ子供心にも自立競争心が覗いている。
そして学校、

学歴社会規格人間製造所

金井 文秋

の課程を経て社会人となってゆく。人間製
造所とは愉快な観方。

信号が青になると隙が出る

安平次 弘道

青信号にある安心感、そこに心の隙が生じ
て思わぬ展開になることがある。

ロハで呑む酒椅子が飛び首がとぶ

若柳 潮花

研修という名で昼の露天風呂

谷 垣 史 好

要領、要心、心すべきことでしよう。
常日頃阿呆で居るから世話が出来

陰になることに馴れて疎まれる

児 島 与呂志

一方にはこうした縁の下の力持ちとしての
黙々とした努力を払っている人達を忘れては
ならない。

忍耐が身につきました四面楚歌

河井 庸 佑

半世紀生きてても人間未完成

塩 満 敏

チリ箆に未遂の罪の二三

西 山 幸

保護色に染って蛙よう跳ばず

川崎 秋 女

こうした句にその時その時の哀感的な、雌
伏を感じる。

母と娘の話へ父も入りたがり

島崎 富志子

指導権初老の妻にまかせきり

越 智 一 水

倦怠期夫婦の鎖のびたまま

両 川 洋 々

夫婦坂そら押せやれ押せ後がない

小 谷 仙 山

夫々に耐えてきました夫婦誓

藤 田 軒 太 楼

これらの句に中年夫婦のホームドラマを見
つける。

一人ずつ話せばみんないい人で

鈴 木 村 颯 子

一期一会に残る人は逝き

江 城 修 史

心の友、いい友人をもてたことの倖は又何
ものにも代え難いものである。

嫁と住む幸せ孫を味方にし

藤 井 明 朗

古稀をまだ若く見られるのがうれし

金 井 文 秋

老いの身へたよってくれるのが嬉し

西 村 早 苗

そして最後に締めくくると佳句二つ

刈り終えた稲に夕陽も積んで押し

久 家 代 仕 男

人生の最後にジョーカー引かぬよう

江 口 度

川柳塔200号記念川柳大会

日時 昭和57年4月4日(日)午前10時30分開場・12時開会

会場 阪急グランドビル26F会議室

大阪市角田町8-47 TEL(06)315-8368

(国鉄大阪駅、阪急梅田駅より歩2分。阪急百貨店東入口前)

| | | | |
|------|----------|--------|---|
| 講兼演題 | 俳誌「青玄」主宰 | 伊丹三樹彦氏 | |
| | 「旗」 | 山内静水 | 選 |
| | 「節(ふし)」 | 濱野奇童 | 選 |
| | 「椅子」 | 河村日満 | 選 |
| | 「腹」 | 長野文庫 | 選 |
| | 「積む」 | 尼緑之助 | 選 |
| | 「祝う」 | 小松原爽介 | 選 |
| | 「伸びる」 | 去来川巨城 | 選 |
| | 「樹」 | 岸本吟一 | 選 |
| | 「塔」 | 西尾栞 | 選 |

席題 当日一題 橋高薫風選
各題2句・締切12時(欠席投句拝辞)

会費 2,000円(記念品呈)

★昼食は用意致しませんので各自おすませ下さい。

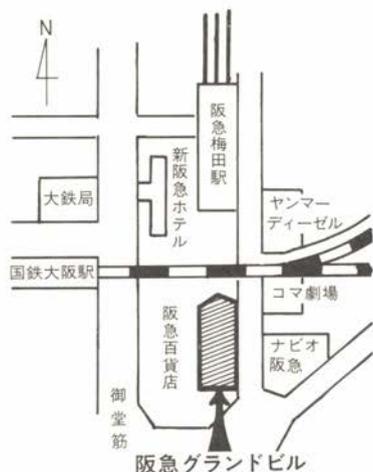
- 開会の辞・菊田いさむ
- 閉会の辞・黒川紫香
- 司会・西田柳宏子

200号記念誌上句集 作品募集

川柳塔5月号に掲載。1人10句
出句料2,000円。同人、誌友を
問わず、ふるってご参加を一。

締切・3月20日厳守

応募用紙は最終頁にあります。





正本水客選

大阪市 村上 田鶴子

結んで開いてやがて一人になりました
びっくり箱をあげたい人がまだ来ない
男らしさはお伽噺の王子さま
エプロンが似合わぬままの人である
紅葉前線あるときめきが寄せて来る
錯覚であつてはならぬ靴の音

竹原市 古田 比呂子

秋の陽よしばしポカンと耳そうじ
つるし柿するりと風がぬけてくる
花束にされて身動きできぬバラ
歩幅まだそろいきれずにいて夫婦
二歳の瞳に少ししたじろく時もあり

八尾市 高杉 千歩

改めて良縁祈る年があけ
春風駘蕩テレビに負けぬ酒肴
野の花の埋もれて咲くを摘み残し
健気にも生きる手段のいろにはほ
刺し子縫う紅の糸なら啞になら

今治市 矢野 佳雲

里帰りほのぼの明ける朝を寝る
口下手が一人で聞いている落語
悪に染む仲間外れが恐いから
平凡な人生でいい父の酔い
この薬まだ利くのかと出してくれ

高槻市 竹内 花代子

ジョギングのように師走飛んで来る
脂肪なし医者がほめている食事
男にも同じ音する洗濯機
泣いた日もあった仏の日を迎え
元日と言えば子供も正座する

尼崎市 奥山 美智子

手鏡に若さをこめて初化粧
年賀状元気な声が弾けそう
昨年と同じ願いの初詣で
カレンダー掛け替えて待つお正月
初日の出こころ新たに燃えてくる

西条市 片山 明水

松茸を観てきましたと言う女房
目隠しをするとうしろの人が見え
トップには立たぬ処世を心得る
人生を小間切れに生き不器用で
もう半歩出ると叩かれそうな杭

尼崎市

丹下玉子

バスツアー他人の中に嫁と居る
秋の野に五百羅漢の素朴な目

秋深く斑鳩寺の仏達

集印帖心せわしく列に居る

留守ひとり秋の夜長の琴を弾く

橿原市

西本保夫

腹立てぬ老父を偉いと思う年齢
奥さんを大事にしろと左遷され

報われぬ親友を歯がゆいとも思う

責任の無い発言もまた楽し

同じ事言うてもボクのは聞き流し

兵庫県

野々口ゆう也

背を向けたまんまで嘘を組んでみる
もう十年生きたとしてもまだ米寿

行列の逆行く蟻がこの俺か

老いの背に落書きをして去る女

日めくりをめくれば昨日をもう忘れ

尼崎市

西村かすみ

妻の不満ほんとに犬の好きな人
米を磨ぐ女になにかうれしくて

共通の趣味を探してまだ嫁かず
大輪の菊の白さに過去の女
入れかえたお茶に落ち着く女客

松原市

本多洋子

拾て来た犬も家族の顔になり

近道を見つけてやつと町に慣れ

お米よし鯖よし紀州の寿司自慢

ブランドは今後のはずみにするつもり

マイペース守る時計を持つている

京都市

松川芳子

老眼鏡もうはばからぬ同窓会

あやされて幼児そしらぬ顔でいる

大穴を当てたと店主愛想よし

だます気はないが言えない事もある

鮭豊漁ただそれだけの事で済み

竹原市

古田鈍舟

目標を少しゆるめて五十坂

自信ないから休まずに歩くだけ

水掛論へ水をかけた日魚の焦り

一輪の菊は切ろうか切るまいか

まだ足りぬように後ろを振りかえり

青森市

工藤路子

文化国紐も結べぬ子に育て

共稼ぎ手抜き上手の主婦となり

初雪の便りに柚子湯誘われる

よくしゃべるのがひとり居て旅楽し

鶴亀のシテを拝して屠蘇を酌む

岐阜市 市川 鱗 魚

泳がねばならぬ子がいる向う岸

青春をきけばバリバリやると言う

踏絵なら足のせて行く恩知らず

難民記事読んでレモンをうすく切る

そこから他人で顔はすぐ忘れ

米子市 寺 沢 みどり

紅葉ほど炎えて静かに終りたし

貸し借りも無くおだやかな椅子に掛け

直線をジグザグで行く反抗期

住み慣れて円くくぼんだ妻の椅子

スタンドを消して無欲な貌となり

唐津市 浜 本 久仁於

原発を遠巻きにして海のデモ

間道と聞く洞穴の草いきれ

秋の陽を泳ぐ鯛山まっかつか

もろ肌如若さを見せる祭り好き

お神輿の後へ神官駄馬に乗り

大阪市 鍛 原 千里

悠々自適で月おくれの本を読む

一つまみの愛さえ指からこぼれ落ち

日だまりへ猫も仲間に入れてやり

ゴキブリは女房のるすを知っている

島根県 東 原 福 子

あちら向きこちら向きして散るもみじ

寄合って水に浮んでいる紅葉

眠られぬ夜を時雨が通り抜け

山の幸火鉢に木の実焼く匂い

ときめいた昔と或る日対座する

梓の中妻はケロリと生きている

温い日はみかん一山買った母

一葉のもみじ法事の膳につけ

生きていてよかった元旦の顔揃う

石垣の中に耐えてる小石一つ

ユニークなところを女見せたがる

種なしぶどう悲しいのかもしれない

羽曳野市 麻 野 幽 玄

初夢は何だったかな良い目覚め

木守柿確かめ最後の一個挽ぐ

思い切り赤を着てみる試着室

公用車全員揃ったところで着き

米子市 田 中 亜 弥

直線で千年杉は天に伸び

清潔な心が宿るガラス窓

祭笛こにくい雨に掻き消され

妥協する線で親子の和をたもち

兵庫県 中 田 白 李

半額で売っても結構儲けてい

熟年のまだ仲人は終えてない

絵日記に祭太鼓の音もかく
虹の橋から私の縁談眺めとく

札幌市

北村 深 星

風に舞う風の素直が子に欲しい

勝気さを姑個性にしてくれる

離婚する覚悟静かな日が続き

虹渡る苦勞明日の子に欲しい

青森県

波 た だ お

若い娘は天下をとったよな笑い

物事の機微を後妻はすぐ外し

恩師だと紹介されててれくさい

降雪へカエルと冬眠したくなり

大和高田市

岸 本 豊平次

知らぬ間に子に残してた亡母の影

夕食の団欒もなくハンバーグ

寺一つプランに入れて老人会

日本を狭しとばかり老人会

唐津市

久 保 正 敏

空耳か皇居遙拝頭石

娘と同じ歳でも他人は女なり

譲歩しても屈服はせぬ頼もしさ

山彦の向うに還らぬ人が居る

西宮市

朝 山 千世子

場末のホステスエプロン姿で客に媚び

ローソクの炎え尽きる刹那にも似た句が生れ

冬至南瓜嫁と無言の日が昏れる

趣味だけはライブルとなる姉妹

尼崎市

中 谷 利 美

恥かいた誤字は一生忘れない

寿命とは畳の縁にけつまずき

喫茶店今日で終りの恋もある

禁煙をしてパチンコと縁が切れ

島根県

松 本 はるみ

たちくらみふと脳味噌のゆるる音

炎えに炎え身をよじらせて葉鶏頭

山びこのかえらぬ裏に何がある

夫よ子よ夕張新坑水をのむ

青森県

岩 淵 一 星

老廃の味方に煙草だけ残り

街角で財布を出さず赤い羽根

機関銃のように咳こむ祖父の冬

新品だからゴム長は間違われ

岡山市

原 田 凡 太 郎

なにやらの一つ覚えにストも入れ

もう誰も聴いてはいないのに喋り

頼りない自信に今日も励まされ

聴く耳を持たぬ男と冬の旅

和歌山県

天 満 三 千 代

汐風に濡れて浜辺の秋祭り

村中を祭りの音にする太鼓

初七日の遺影へ涙のつぼを開け

着飾って出たい気持になるも秋

高槻市 田崎 あき子

引いて又縁談波のように来る
徒競走母の視線は子と走り
笑う子へ犬も笑った顔をする

撞く人の力に答う鐘の音

寝屋川市 稲葉 好子

デパートに春こぼれそう彩がある

裏の裏知ってしまったから打算

べんちゃらもしたがあつさり断わられ

二十年似た物夫婦笑えない

兵庫県 円増 貞子

巢立つまで肩の重さは言わぬ母

鳴きながら部屋に飛び込む稲雀

通夜の灯がかすかにもれる雨の庭

坂道を母いたわりて菊日和

島根県 松本文子

菊の香の中で心の垢落とす

大根の詩湧く母の台所

父逝つて父のベッドが広く見え

呑みこんで川は汚れていくばかり

能本町 高野 宵草

父さんと指切りした子の毬はずむ

華やかに散らして公孫樹が身構える

食べるだけ食べて悔いなき腹ぐすり

悪者になつてこう平和が乱れそう

島根県 星野 侑正

聞き捨てにならぬ話と割つて入る

コンピュータの盲点ついたすごい奴

手鍋など下げる気のない現代娘

土壇場になつてもかまきり身構える

弘前市 田中 叶

修道女時刻を見てる旅の駅

駐車場裏にいわれのある社

背をむけて寝た夜遠くて犬がなき

金借りたことなど忘れひさしぶり

鳴門市 八木 芳水

スーパーへ物申す術はない小売り

定年で辞めたとはこりらしく言い

何よりも酒の支度の要る友で

納得はいかぬ反対しないだけ

大洲市 米沢 暁明

いろりところろ民話受けつぐ茶がうまい

旅みやげ見たり飲んだり食べたもの

柿とりの隣へあげる枝は置き

尺八の音も虫の音に和して澄む

鳥取市 武田 帆雀

よい話ないかと先に先手打つ

点数が欲しくて丸く丸く言う

快調な妻の寝息を聞く夜長

過去問わず語らず女に親しまれ

秋風の寒さへ豆をたたたく音
島根県 岩佐 富子

立冬へ暦どおりの雪ニュース

これからはお世話になります電気器具

別れ地蔵峠に佇って路おしえ

大阪市 鈴木 節子

心配ごとが一つ消えたぬくい朝

あつちの孫にもこつちの孫にも差をつけず

住みなれた街の風にはつい甘え

コーヒーでさらりと流す嘘一つ

大阪市 山田 松太郎

エプロンが知る一日の主婦の役

エプロンはいらぬのんびり母の旅

動くから何時か地球も止るかも

大阪市 清水 康恵

迷い込んだ小犬裏町離れない

話題などいらぬ夫婦向い合う

かさかさと落葉の中に夏の虫

新宮市 辻 はじむ

頂上をめざして毬は転がる気

ゴキブリを見逃してやる盗み酒

橋上で蹴られて石は思案する

島根県 藤原 鈴江

支えなき一本風にさからわず

自嘲ともとれる笑いで幕を引き

折角の人生余さず使おうよ

兵庫県 森脇 和子

公園の手ごろな石へ老夫婦

ドア不意にあいて北風背を叩く

我が子ともリズムの合わぬ年となる

米子市 足立 由美子

平凡な幸福ソファで本を読む

同色を好んで母娘のうまが合い

嬉しきは顔から先にしゃべり出し

唐津市 仁部 四郎

少年のバイクに道が不意に切れ

ローソクを売る老僧と拝み合い

あの人が市長でしたか赤い羽根

熊本市 有働 芳仙

胎動へベーターベンは聞かすまい

過ぎ去った風のことばを追いかける

美しい言葉を探している月夜

大阪市 白石 潔

五十年豪快に生き颯と逝く (柳仙さん)

忽然と逝った魁偉な君偲ぶ (")

ぬる爛を風呂に持ちこむ妻の留守

岡山市 串田 句味地

身の不自由な老妻へ夜更けの掛蒲団

正直な小石で蹴られる方へゆく

大切な話に欠伸をした自戒

長崎県 岩崎 和子

前進はしたが目標見失い

左右から攻められ芯のない男

ブランコが素直にゆれる空の青

山口県 高崎喜一

盗み酒本當にうまい一滴

喜びの涙カラリとすぐ乾く
梅千もチョココンと祖母の喜寿の膳

岡山県 松本元江

スーパ―は階段の隅遊ばせず
マネキンは裸のまままで待たされる

紅葉に見えた松喰い虫の山
大家族夫婦げんかも中断し
蹴り上げた小石が澄んだ音で秋

西宮市 妹尾春江

声高く天に向って吠えて見る
戌の目でとらえた広い銀世界

エプロンを取れば正月姿なり
仲良しの儘で別れた手の温み
鬼を打つ豆入念に煎っている

堺市 田辺哲寿

飾らない人の進歩が光ってる
噂にも聞かない人が夢に出る

何もかも吸い込みそうな青い空
連れがいるので分別が迷いだし
お祭りに行つて本など買つてくる

旭川市 朝倉大柏

百十番するが名前は伏せておく
エリートは限度を越えぬ無礼講

美しく飾つて心覗かせず
埋み火をつつく女へ燃える恋
秋雨にしとど濡れ添う枯芒

大阪市 大野武太

一番を通し兄弟縁うすい
その案を出さねばよかつたきつい役

相槌を打つ間のうまさ夜泣きそば
下戸の顔会費以上に飲んだ顔
窓際に移つて当る陽が寒い

鳥取県 羽津川公乃

捨てかねて雑書ばかりの中にすむ
悪友にアリバイひとつ借りておく

エプロンをおしゃれ着にして若いママ
疲れても秋最終の行楽日
エプロンにそつとくるんだおすそわけ

退職の挨拶賀状で締めくくり

大阪市 山本 炬 齊
前垂れをつけると此の屋の人となり

白萩が乱れ咲く庭黄菊添う
好物のリングオ食べ居り秋深し
郡山市 岡 田 すみれ

ひとひらの花にも思いつのるなり
最終の電車で帰る息子待つ
酒供え亡夫の心に近く居る
八戸市 島 田 昭 治

弱虫め沙婆に見切りをつけた友
満足に酔っているよに散る落葉
車持てぬわけ色盲の故にする
鳥取市 湯 村 色 舞

愛犬も主人も夜遊びして狂い
娘の笑顔母の迷いを消してくれ
肩ぐるま拒む娘いつか色気づき
鳥取県 石 井 雅 水

トンネルは一瞬会話途切れさせ
過疎の秋御輿をかつぐ肩もなく
病む友の愚痴を素直にきいてやり
大阪市 杉 本 智慧子

街路樹の紅葉嬉しいハイハイタウン
チャリティーであれもこれもと欲しくなり
京都北山落葉のクツシヨンふみしめる
島根県 岩 田 三 和

デートの日発声練習して出かけ

よちよちの子豚のいたずら鼻でつく
すすきの穂自然を守る太刀になり
鳥取県 和 井 観 洋

捨て石の心がよめぬまま老いて
細道をどこまで運の無い男
カーテンを引いて女の窓が開く
室戸市 浜 口 秀 子

逢ってどうなる過ぎ去った人なのに
逢いに行く罪のしづくに濡れながら
じゆず玉の逢えばちぎれる逢わずいる
大阪府 権 安 達 一 郎

親のエプロン娘が着て妻の三周忌
アジャパーはあゆみの箱を残し逝く
エプロンもかくし切れない娘のお腹
東子市 小 山 悠 泉

白鳥の誇らぬ白が美しい
今年へのドラマ初まる初日の出
自作自演の笛にピエロとして踊り
高知県 山 下 登 舟

ポケットに粟一粒の月曜日
相槌を打って心が縛られる
コスモスの中を縫いゆく車椅子
松原市 佐 藤 藤 子

私だけ主婦專業でいる焦り
内だけがふとん干してる秋日和
此の夏も着ない水着を仕舞いこむ

酒飲もう仕事のアカの沁みる日は
とくとくと喋る女が持つ孤独
コトコトと煮込む炭火が母のコツ

大阪市 吐田公一

玄海を染めぬく紅の曳山頭
初日の出おんなじように東から
出雲まで詣つてみても嫁が来ぬ

唐津市 浜本義美

菊華展意気揚々と妻を連れ
母老いて童話のような国に住む
因習を破る決意の指輪買う

浜田市 佐々木裕

まだまだの腕だとさとす盆栽展
有罪へ女の一撃すこく効き
値は値だけスパー決して損をせず

八尾市 山下みつる

生き甲斐と力む気もなし句三昧
栄転も左遷も同じ万歳で
生き甲斐が無いと生きてる賢沢さ

大阪市 塩田新一郎

表面だけ優しい事を言う他人
吊し柿正月迄に大分減り
良心が私に損を言い聞かせ

岡山県 池田半仙

引き抜いて知る雑草の根の深さ

大阪市 日阪秋子

大きく揺れる花より小菊の安定感
無欲でも頂くものは頂いて

高知県 山崎広風

たまご焼き子供の頃の味が
盗まれたままで自転車ほっとかれ
生きがいは何かと巢立つ子に訊かれ

西宮市 林はつ絵

減反の田んぼで蕎麦がやつれ咲く
おたがいの絵には触れない嫁姑
二級酒の甘味わかる人わかる

大阪市 板東倫子

銀行の内と外から狙われる
政商は今も天野屋利兵衛なり
最終で飛ぶと切迫した電話

大阪市 坂本仙吉郎

バスツアー見落す飛驒の国分寺
飛驒の朝どの宿もまた朴葉みそ
大家族エプロン外す時もない

唐津市 桑原掬治

猫よりは自由が無いと犬が吠え
秋日和陽射しを植木の鉢が追う
この土地は高価なんだぞあわだち草

羽曳野市 佐野白水

講習中野球を聞きに行くトイレ
四十から金が出来る卦と言う
生活力旺盛会うたび職変り

大阪市 堀口 欣一

もう少し飲みたい顔へお茶が出る
まだ知らぬ国がたくさんある地球

鶴見区のむかしはツルが居たそうな
本場所の君が代世論に拘らず

兵庫県 藤原 捷一

尼崎市 矢萩 貞子

座卓にも飴置いて老いの日日
校庭の落葉は風と縄とびしてる

陶芸を作る手つきは一人前
子の便り中読みながら返事かく

大阪市 山根 いつを

工事中遠まわりして犬にあう

奈良県 宮川 古都路

便りとは違う予感が母にある
窓のない家に明るい嫁が来た

年金は妻より先に行けぬ枷
お色気は灰になるまで持っている

奈良県 宮川 古都路

愛知県 国分 甲子郎

海峽のゆれる所で飯が出る

境港市 細木 歳栄

子育ての日日の笑いもない暮し
背泳ぎの妊婦の腹の浮き沈み

信心が三分の群れに我も又
名物のかるかや餅の名もあわれ

境港市 細木 歳栄

大阪府 平井 露芳

奥の院信者ならずもかしこまり

兵庫県 奥野 テル

岸和田市 吉水 照江

脱ぎ捨てた姑のつかれを足袋に見る
幸せは嫁とくだけで笑える日

兵庫県 奥野 テル

七十のハッスル耳も目もつかれ
寝付かれぬままにふけ行く旅の宿

歩道橋交通地獄見て通る
盛り場で財布のありかたしかめる

倉吉市 今村 夕路

旅先で最終列車に乗り遅れ
エプロンの似合う花嫁喜ばれ

追伸にあの娘も嫁ったと母の文
夫からへそくって娘にへそくられ

八尾市 宮崎 シマ子

泉佐野市 大工 静子

夫からへそくって娘にへそくられ

八尾市 宮崎 シマ子

尾鷲市 渡辺 伊津志

歌声に人生があり恋があり
夕立に洗われながら家鴨来る

尾鷲市 渡辺 伊津志

尾鷲市 渡辺 伊津志

島根県 堀江百代

秋惜しむ涙のように散る枯葉
たいこ判押しでもよいとおだてられ

尼崎市 中辻千子

作業着を洗う仕合せ家まねく
働き蟻の歩く歩幅がくずされる

新潟県 高野不二

国力の差と知る無料の美術館
日本人に家族のようにあいさつし
(メキシコ、アメリカの旅)

大阪市 山脇正之

銀行は庶民に融資したがらず
我が庭の最終飾る石露の花

交野市 山本テルミ

真白なエプロン自我を主張する
マイホーム大黒柱が見当らず

岡山県 吉末謹太郎

熟年の余燼に生きる詩の道
魔術師は罪をつくらぬ指をもつ

笠岡市 松本忠三

雨になるパーセントです予報です
水仕事母に任せてマニキュア

米子市 野坂なみ

天職を得てから寡婦の若返り
正直な道に石ころ多すぎる

唐津市 山下勝一

よたよたと精一杯の夫婦独楽

一服の煙が今日を無事にする

寝屋川市 立床晴風

書き添える言葉を加えている辞典

一円を貯める心に意地芽生え
泉佐野市 真崎浪速子

景品もインフレらしい豪華版
書いて消す伝言板にある歴史

河内長野市 糸谷春草

熱心にヤング立ち読みする漫画
薬にもなる一鉢のアロエ買う

浜田市 中川幸一

修身を知ると知らぬで嫁姑
若い頃語るに混ぜたフィクション

和泉市 岡井やすお

あゆみの箱育ちアジャパー天国へ
オンライン犯人手配もオンライン

唐津市 木塚素石

妻病んで冷凍品の勉強す
菊花展あの人がねとする噂

熊本市 北川一進

ぶの悪いところ記憶にありません
たて前と本音何処か狂った正義感

東大阪市 三宅哲夫

日本に生まれた幸せの秋日和

大阪市 野村智

又候と賀状書く日のめぐり来し

句評リレー

伊藤 茶仏

香川 酔々

濱野 奇童

河村 日満

嘘をつくことも人間美学かな

岩 本 雀踊子

茶仏 流石老練な作品、美学が持つ幅の広さ、重味が味わい深い。

酔々 嘘も方便ということがある。美学とは、少しオーバーだが、逆説的表現と考えられないこともない。

奇童 「かな」を「哉」と考えると、ある種の人達への皮肉となってくる。私は「人間美学」などと勿体ぶったあとを「かな」と、とぼけたところにこの句の面白さがあると思う。ただ「美学」ということばが適切であるかどうか気になるが。

日満 私はこの「かな」は「？」がつく「かな」ではないか、と考えている。「そうかな」「ほんとかな」の「かな」としてみれば、また別の本質が出てくるのでは。

茶仏 大胆な表現は作者の本領でもある。酔々 雀踊子氏の作品としては、おとほけすぎではないかとも思われる。

奇童 大胆な表現と、おとほけは意識してねらった作品と思うが。

日満 どうも私一人が作者のおどけに乗り

降ってきたよろこび話が前後する

高 橋 千万子

茶仏 よろこびの話はつきないものである。お祝いに駆け付けてくれた人達への応対振りが目にみえるようである。

酔々 人間万事塞翁の馬という故事があるが、まさしくこの句は、その吉がやって来たときの人間の心理をついた作品である。

奇童 「話が前後する」とはうまい見付けである。喜びに有頂天になっている人物の気持ち表現するのにぴったりである。

日満 皆さんの評でつきているようだが、破調が気になるところ。

茶仏 リズム的にも字余りが、気にならないのでは。

酔々 作品としては、はっきりしているもので、そう異なつた評は出て来ない。リズムもいたし方のない所であろう。

奇童 リズムはそれほど気にならなかつたが、言われてみると中八がきこちなさを感じさせないでもない。十七音字には治まっているのだが、許されて良いのではないだろうか。

日満 九・九の二段切れだが、私にはやはり「話」にひっかかるものがあり、リズムミカルに咽へ通らないのだが。

すぎた感じだ。茶仏氏評のように、老練である。

君の持つ眼鏡明日が見えるかい

辻 文平

茶仏―天眼鏡で覗く易者のそれではない。皮肉味たっぷりで、ユーモアもある。

酔々―おもしろい作品。一寸先は闇だから。奇童―その場その場を生きていく人間に対する皮肉。その人間は「君」だけでなく「僕」も同じであろうに。現代に生きる人達への警告とも受けとれる。

日満―「うまい」という外はない。私ではとても作れる句でない。「警告」とまでは受けとれないが。

茶仏―日満氏の評価に共感。

酔々―この作品、最初一見したとき、普通の眼鏡を想像したが、こんどは、双眼鏡か望遠鏡と考えたらどうかと思った。その方がよりおもしろくなるようだが。

奇童―確かに望遠鏡を置く方がおもしろい。「警告」と言う言葉は適当でなかったかとも思うが、あまりにも目先のことしか考えない人の多い今の世を思うと痛烈な批判ではある。

日満―作者のひと言が欲しいところ。評者の考へすぎは注意したい。

本当のことは聞かずに娘をかえし

菅 井 とも子

茶仏―母親のこころを鬼にしての、思いやりが迫るようである。

酔々―女親の慈悲なのか。やはり女性にしかできぬ作品なのであろう。

奇童―同感。娘の置かれた環境、そして心境を知りつくした上で女親の行動であらうと思う。平凡な表現の中に、母親の愛情がにじみでている。

日満―何かすつきりとせぬものが心に残るのは、私の性格で見からであらう。「女性でしかできぬ」と言われればそれまでであるが。

茶仏―おんなは三界に家なしの諺が、踏台になつてゐる。

酔々―「女性しかできぬ作品」と評したのは、日満氏評のごとく、すつきりしないものが残るからである。想像をたくましくするのも、案外この作品の長所となつてゐるのかも知れぬ。

奇童―娘の乳離れを願う母親の気持ちだと私は考える。すつきりしないものが残るとすれば上五の関係だと思つが、茶仏氏の評に賛成だ。母親の温かい涙が伝わるようである。

日満―この句のようなこともある、と言われればそれまでだが、私にはとてもそこまでの理解はできない。むしろ根掘り葉掘り、の状況が浮かばれて仕方がない。

稲光り遠く戦う国がある

谷 真風

茶仏―稲光りは豊作の前触と言われている。それにしても家を失ない飢餓に瀕する多くの難民を抱えて戦う国々のニュースがテレビの映像に送られてくる。

酔々―茶仏氏評は、稲光り―豊作―飢餓の難民―戦う国と連想されているが、評者は、直接、稲光り―砲火と連想する。

奇童―酔々氏評に賛成。「稲光り遠く」か「遠く戦う国」かの読みで、句から受ける感じは随分変わってくるが、稲光りの強烈さが、砲火を強調し、戦火にとまどう人々を浮彫りにして余りある。

日満―酔々氏の評がよいと思つ。こんなの

を佳句といふのであろう。「谷洗馬ふと戦いに浮かびし名」の句を想い出した。

茶仏―稲光りから連想しての中近東諸国の戦火に戸惑う情景と理解したい。

酔々―佳品である。

奇童―同感。

日満―リズムもよく、好きな句である。

幸も廻り舞台に乗ってるさ

垂井 千寿子

茶仏―乗ってるさに、一工夫が欲しかった。

酔々―これも千寿子作品と同巧異曲の作品と言えよう。廻り舞台に目をつけたのは、さすが。

奇童―仕合わせな生活の中に浸りきった作者の気持ちは十二分に汲み取れるが、下五の「乗ってるさ」がやはり気になる。

日満―作者は下五でその倅せ振りを強調したところであろうが、下五で流れた感じがある。

茶仏―推敲が欲しい。

酔々―やはり下五がすこし気になる。

奇童―惜しい作品だ。

日満―皆さんの評のとおり、下五の推敲を

必要とするようだ。「廻り舞台」は「回り舞台」ではなからうか。

廻転木馬脱線したい日もあろう

内芝 登志代

茶仏―錆ついた回転木馬への労りが詩い上げられている。

酔々―コンベアに乗せられているような、我々の生活に対する痛烈な批判であろう。

奇童―回転木馬はよく使われているが、この句の場合、現代社会に生きる人を言い得て妙。わたしは、現代人に対する労り、ねぎらいとしてとらえたい。

日満―酔々氏、奇童氏の評に賛成する。というより教えられるところ大。最近「回転木馬」が出回りすぎるようだ。

茶仏―酔々氏、奇童氏の評に尽されている。

酔々―佳作としたい。

奇童―下五が生きて働いている。

日満―心情句として、よくまとめられているが、佳作とするにはいささか躊躇せざるを得ない。

愛染帖

橘高薫風選

おしめ替える孫と兼用温風機
踏台と懐炉をたのみ書庫に老い

倉敷市 水粉 千翁

激しさの冬のいのちの温さかな
肩抱いてあしたがあると云うてくれ

高知市 西川 富恵

近寄ればたちまち雪になるひとと
母のない子が乗りたがるメリーゴランド

和歌山市 西山 幸

合掌のなかのうつろな主義主張
すこし狂うて誰にも会わぬ会えませぬ

尼崎市 黒川 紫香

大部屋が花束一つ持て余し
古寺がここにあるぞと大銀杏

高槻市 若柳 潮花

揚げ幕を出たら私でない私
京都まで夫婦で茶漬食べにゆく

旭川市 朝倉 大柏

鏡台に吸われるが如若さ去り
策士持つ辞書に突刺す語が並び

大阪市 小出 智子

かたくなと思うてならぬ老母の下駄
食堂街あんまり食べたいものもなし

米子市 小西 雄々

楢山の紅葉は見ないことにする
盛り場の恥部は見せないネオンの灯

岡山県 嘉数 兆代賀

恍惚のあとさきにある軽い飢え
人生の掟で回る独楽が澄み

米子市 政岡 日枝子

再婚の又染めなおす女道

盛り場で真珠の様な恋拾う

松原市 佐藤 藤子

仏像のひだの流れにある温み
番茶飲みスペーススヤトルの砂を聞く

堺市 大道 美乙女

無を有に変えたおんなの白い指
鳥だけが知ってる木の実の熟れ具合

島根県 小砂 白汀

人間がこせこせしよるナ冬トンビ
青春のグリーンピースよ煮らるるな

西宮市 林 はつ絵

吾亦紅あなたが藪をわけてくる
爆音が消えると思慕が渦になる

島根県 木村 はじめ

忠告を素直に聞いてあなどられ
小人の閑居は愚痴ることばかり

大阪市 川口 弘生

浪費する時間だんだん重くなる
腹を貸し乳を与えて愛無限

大阪市 神夏磯 道子

紅葉のこよなき角度亡母を背に
愛のあるうちはコロッケもつまいなり

岡山市 井上 柳五郎

よく我慢したと味方の顔になり
縁談でわが家と娘の評価知り

山口県 高崎 喜一

昇進に女房は先に金を聞く
不美人は変りませんとコンバクト

岡山市 川端 柳子

いぶかるときれないなバラの刺が伸び
倉敷市 藤井 春日

柏原市 大峠 可動

人間の屑はいくさ待っている
思想激んで落穂拾いの兵隊よ
中年の男点線ばかり引く

青森市 工藤 甲吉

六根を清浄にして雪は降る
時雨忌を奥の細道地酒とし
平和ボケ山葵唐辛子を忘れ

大阪市 河野 君子

十二月掌を握っても開いても
ふり出しへ戻る靴を磨いてる

富田林市 藤田 泰子

箱彫って私の部屋は箱の中
私から抜け出して行く影ぼうし

西宮市 野呂 鶴汀

憎む人ありて手酌の酒を呑み
背に刺さる視線を受けて焼香す

伊丹市 榎谷 寿馬

川のない橋を夫婦のチンドン屋
小走りの和服が風を冬にする

町田市 竹内 紫鏡

鳳仙花に触れる思いの嬰児抱く

今治市

月原宵明

富有柿正座を崩さない甘さ

寝屋川市

柴田英千子

猫に留守頼み老夫婦の外出

尼崎市

奥山美智子

気に食わぬ雲だと思ひ綱を編み

鳥取市

河村日満

秋桜封書に切手貼らぬまま

和歌山市

浦野和子

叱れないともきれいな出来心

松原市

本多洋子

北壁の険しさを描く冬を描く

八尾市

松下蕉露

自惚れているぞと云える友もない

大阪市

山根いつを

立冬へ犬の寝床も替えてやる

岸和田市

古野ひで

裁判所でも鬭争のピラ貼つてある

和泉市

岡井やすお

直線の道へ逃げ水待ち伏せる

米子市

桑原伊都

行革の波間でゆれる寡婦ひとり

米子市

田中亜弥

泡立草衰え菊が咲き誇る

尼崎市

中谷利美

師走の日滑車をつけたように過ぎ

羽咋市

三宅ろ亭

ガラス窓でてる坊主泣き出した

岡山県

松本元江

脱サラの妻が後押すえんやらや

島根県

堀江正朗

思いきり笑いたい人生のたそがれて

堺市

伏見茂美

新しい生命を抱いている枯葉

鳥取県

鈴木村颯子

日の暮れた音が隣りの工場から

鳥取県

羽津川公乃

返事無くともよろこんでいるきつと

京都市

山本規不風

夜が明けるうごめいてまた日が暮れる

今治市

八塚三五島

ビルの街四角い窓が冷めたすぎ

唐津市

新岡回天子

待つ人もなし来てくれる人もなし

松山市

谷真風

人生の栄枯盛衰稲を刈る

今治市

越智一水

昼のこと忘れられない日が冴える

岡山県

浜野奇童

通りゃんせ七つになった学齢期

奈良県

宮川古都路

行革でまた休耕をせまられる

今治市

塩満敏

諦めの煙草へ灰皿ポツと燃え

和歌山市

福本英子

つつましい生活へ雪は降りほじむ

鳥根県

柳原秀子

首領一人仮面の下でほくそ笑み

羽曳野市

舟木与根一

歲月が生臭さ消す弾の跡

米子市

菅井とも子

ピアノ弾く母を独占したい自我

堺市

久井富子

孫の名へ頭領運を押しつける

松江市

稲岡正之

滑らかな石をえらんで鳥の墓

倉吉市

奥谷弘朗

解決に戦法変えて和を保ち

八戸市

小泉紫峰

苦と薬を上手にまぜて金の糸

岡山県

稲岡正之

自然との調和を望む天の声

豊中市

満仲きく子

招かざる客は陽気に靴を脱ぐ

浜田市

佐々木裕

我が家にも秋が来ていた娘(んご)

京都市

松川杜的

舞い落ちた桐の一葉の無言劇

米子市

石垣花子

忽然と消えたし月の芒土手

平田市

久家代仕男

葬列を見事に染めて陽が落ちる

高知県

赤川菊野

石仏安らぎ顔の花の寺

和歌山市

松原寿子

宝とも重荷ともなり行く人生

島根県

堀江芳子

てんと虫飛び損なって翅畳む

尾鷲市

渡辺伊津志

冬の貨車おんなの胸を通り抜け

和歌山市

松原寿子

宝とも重荷ともなり行く人生

茨岡市

木山遠二

旅先の男のひげはピンク色

吹田市

西川景子

大阪市 吐田 公一
毒舌も錆びて落武者らしくなり
六人の娘が綴る人生譜

寝屋川市 宮尾 あいき
浜田市 中川 幸一
目減りした千円札に文学者

八尾市 山下 みつる
ラブシーン 凄い所で妻を呼び

唐津市 岩崎 実
蕃から人の目誘う花の性

唐津市 久保 正敏
団体の一人二人はいらぬ夜具

京都市 都倉 求芽
ベタ足の小股で僕は歩いてきた

岸和田市 清野 こう
絹の雲流れて深む秋の彩

東大阪市 竹中 綾珠
山茶花の白は目立たず咲いて散り

唐津市 木塚 素石
老夫妻生活展に生きて居り

唐津市 浜本 久仁於
中道に右と左がある路線

今治市 矢野 佳雲
あの場合僕でもユタになりましょう

東大阪市 市場 没食子
古釘を延ばしてた頃の日本地図

和泉市 西岡 洛醉
鼓動さくさく大地へ音伝う

鳥取県 林 露杖
煩惱も歳相応に色を換え

羽曳野市 麻野 幽玄

初夢も見ましたここちよい目覚め

米子市 雑賀 美世
窓際の椅子から仰ぐ秋の空

三重県 坪田 冬花
へそくりが又一鉢の蘭に化け

米子市 青戸 田鶴
流れ行く水ひと時をとどめたい

米子市 寺沢 みと里
手ごころをせぬ直線の瞳にひかれ

青森県 岩淵 一星
梯子酒下戸はグラスを汚すだけ

藤井寺市 児島 与呂志
人生の宿題まだまだ老いとれず

高槻市 田崎 あき子
人越しに二十年目の人見つめ

堺市 高橋 千万子
再会の約束火種深く埋め

大阪市 中西 兼治郎
酒よりも煙草やめたをほめられる

河内長野市 井上 喜醉
制服を着てたらネオンもただの色

守口市 羽原 静歩
ふるさとの城マドンナのような人に会い

米子市 野坂 なみ
醇朴の地で水神も祭られる

兵庫県 奥野 テル
電話ではことわられそう足運ぶ

鳥取市 武田 帆雀
麗人のドレス閃光浴びて来る

京都市 山本 桐下
来年も幸あれと綴る住所録

八戸市 島田 昭治
脇見せず無心に咲いてる菊が好き

岡山県 荻野 鮫虎狼
凍てついた組春の音を待ち

大阪市 松尾 柳右子
闘病のバラを見つめてあきもせず

岸和田市 原 さよ子
孫の問い答に困ることばかり

和歌山県 若宮 武雄
背信の日の青空は低くする

西宮市 妹尾 春江
古日記初恋らしき人の名も

西宮市 朝山 千世子
秋深む時効の傷を温める

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橘高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「運」 選者 橘高薫風

締切 1月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町6-4 NHK

大阪放送局 老後をたのしくの係

発表 1月30日(土) ラジオ第一放送

午前9時15分から

披講技術について

直原七面山

御承知のように同じ余白文学の系列に属している短歌、俳句、川柳を詠唱時の呼吸の面から分類してみますと、短歌は三呼吸詩で俳句は二呼吸詩。そして川柳は純然たる「一呼吸詩」であります。

ところが短歌、俳句は、呼吸と次の呼吸との間にある間(ま)そのものが自然にかもし出す情緒情感を心ゆくまで味わい楽しむことが出来ますが、川柳では、十七音字を一呼吸(一度息を吸い込んでその息を吐き切ってしまふまでの間)の中で読み終え詠い上げて行かなくてはならないのですから、呼吸間のまの情緒を楽しむことなど到底出来っこありません。従って、作句の上でもまた披講の上でも、短歌、俳句に比べて格段の違いがあり困難さを伴います。

こう言った点から申し上げてみますと、川柳塔の一月号で若本多久志氏が「川柳つれづ

れの記」の中で「……昨今の川柳作品で気になるのは、ある、ない、式の強い肯定語や否定語で下五を結ぶ傾向である。これは初心者(私の見るところ最近では猫も杓子も、ペーラン作家を含めてある、ないを盛んに使っている。その言葉の及ぼす悪影響など少しも考えないで)の作品によく見られる。その通り川柳(そうですすか川柳、一種の報告であり説明句)や標語川柳」と余り変らない。そしてそこには余韻も余情(余白文学の最善の特長であり、しかも川柳句の最も大切なもの)も全く感じられない」と述べておられますが、私もこのご意見に全く同感でございます。

さて氏のごお言葉を裏返えしてみますと下五はある、ないと言つような自分の意見のみを強く前面に押し出した肯定語を使って、句主自ら物事の終結、終末、決着を告げて、句が必ず持つていて放してはならない余白を奪つような無慈悲まる終止形の言葉を使うのではなくて、必ず事の結末は先に伸ばして、その権利を句の鑑賞者に委ね切る(句主自身の主張はあくまでもさし控え、その抱擁力の豊かさ謙譲の美德を示す)未然形の言葉をもつて結ばなくてはならないと、こう強調されておられるのではないのでしょうか。

何故なら、川柳にはその一呼吸の中で、句

の持つている(展開性と余情と余韻、香りと潤いと句品など)全てのもの、全ての良さを百パーセント、否それ以上に自分が持つていける披講技術(声の高底、声音の強弱、声の艶、スピードの遅速など)を最大限に駆使しながら情感を込めて詠唱しつづつての人々に(感動的に)伝え、訴え、披露して行かなくてはならないと言つ難かしい演技が要求されているからなのです。

さて句の良し悪しは(耳を通しての)披講の仕方(上手下手)で名句ともなれば駄句にもなります。川柳活動の大部分が例会、川柳大会に出席することである人々にとってはこのことが非常に大きな関心事であります。

さて、ここまでお話しして来れば、私の言う披講字や披講技術が(例会、大会を盛り上げるためにも)川柳人にとって、特に選者クラスの人々にとっては、如何に重要であり、必要欠くべからざる問題であるかと言つことが少しは分つていただけたことと思ひます。ならば本目ただ今からでも披講技術の修得と訓練においそしみ下さいますようお願いして止みません。

川柳 たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

創立二十五周年

記念大会

ご声援ありがとうございました

ございました

誌齢三百号を期に

いま一度

初心に立ち返ってと

思っています

そつと見守って

やっってください

高橋 鬼焼 時 一 路 森 井 菁 居 三 宅 不 朽 古 谷 節 夫 榎 田 英 詩 古 田 鈍 舟 古 田 比呂子 岩 本 文 晴 岩 本 笑 子 小 島 蘭 幸 山 内 房 子 山 内 静 水 八 木 秀 水

ほか会員一同

頌
春

元旦の遠吠え

紀州路は人恋し

川柳わかやま一同

機械が秀句を憶える話〈2〉

竹内紫 鏑

情報サービス業がいま盛りである。科学論文を探し出すサービスも、手作業から機械検査になり、さきに迷った数百万件からもっと多い段階に入ってしまった。特許や論文の中の「回想」を抽出するだけでも、手作業と機械検査とは比較にならないぬ能率差が生じている。これは予想されたことであり、しかも科学技術の進歩に欠かせぬことだ——とする世論に立って、議会の承認、予算の投入を経て

一種の「みどりの窓口」のような情報サービス(有料)が現に行われている。もちろん、この仕事は産業界、学会の専門家を動員して入力が続いているし、やり出したからには続けなければならぬ。それをやっているのが私の勤め先(JICST)である。

私たちが検索する資料は、内容梗概だけでも三百字、そして題題だけでも川柳より長いのである。したがって、短詩型作品と作者名を機械に覚えこませ、キーワードを使って抽

出することは、技術的にはまことに簡単。しかも今年から、当用漢字でひらがなまじりて打ち出すサービスに移行している。

文芸作品となると、古い漢字が処理できなくて仮名がきになるよつでは困る……という議論が出るだろうが、それも研究済みである。いまの科学論文抄録のオンラインサービスでは、当用漢字の九五%を使っているが、まず不自由がない。この点、俳句はともかく、川柳のプリントアウトにはまず問題はない。



百万件とか二百万件の論文から、希望の内容のものを出出す手順は、次のようにしている。まず、一種の索引語辞典を作り、これにキーワード(名詞約三万)を収載しておく。登録にも抽出にもこの用語を使う。あるキーワードが付与されている論文の数を機械に問えば、何百件ありと答えてくるから、別のキーワードとの組合せで絞ってゆく。具体的な

容が知りたければ、直後に標題や著者、誌名、発表年月などをパチパチと打ち出してくれる。

この手法を俳句に応用するなら、第一のキーワードとして季語を使うのが自然だろう。では川柳や無季俳句ではどうだろう。検索用単語を決めるには、例えば『番傘一万句集』

(昭38)の索引から見当がつく。「愛」から「腕章」まで五十音順に約二千語ある。この程度ですめば簡単だ。「女」「妻」「顔」「孫」といった主題の句は目がまわるほどの件数になるが、年代や共存する他の単語で限定すればぐんと絞られるはず。

いま「とんぼ」「やり」「長話」を単独に質問語とすると、それぞれ何十(百)件ありと答えてくるだろうが、この三語が併存する作品はあるか?と質問すると、一―二秒後に、「一件、古句、長話とんぼがとまるやりの先」というぐあいに、漢字とひらがなの字幕が並ぶことになる。記憶装置の種類により答える速さはあるが、こういうオンライン検索の可能性は証明済みである。

連想ゲームのスリーヒントでは、答えられる格言の数は知れたもの。大抵の川柳は人間の記憶量の限界の外にある。

なお、歌の出だしや、五七五の上五の言葉をあいうえお順に並べた索引を見かけることがあるが、その流儀は有効ではない。その言葉をお忘れてしまったら、とりつくすべがないからである。

さてこのバンクの話、もちろん費用をぬきにした夢のような話であるから、そのつもりでいて頂きたい。やるのなら、過去の秀句何十万かを入力するため、キーバンチャーを初め人手が要る。JICSTで蓄積した二二〇万件の情報も大勢で六年間に仕込んだものだ。ただ、一篇が四百字ほどの抄録よりも標題だけ欲しい場合は遙かに容易である。また科学の原論文の保管に現在大変なスペースが要るのに比べれば、句の方は一万句分がB6版厚さ二センチ弱とみて、二百冊やそこらは大したことでない。府県別の図書館内に川柳コーナーの棚があれば足りることだ。これが出典を紙面で追うときにめくる資料になる。一方コンピュータのあるデータベースに向って、オンラインで質問を發し、「ある発想の句」を抽出してもらうという経路ができる——ことになる。もちろん、預金つまり作品登録も毎月行なえる。引出しても減らない知的財産だから、犯罪のおこる気づかいはない。もちろん抽出にかかった時間（秒数）に応じて料金は払わねばならない。技術情報の場合、一分間二〇〇円ぐらいである。

とは新規な作品の誕生する率は少なく、蓄積してみると、何十万句で止まりそうな気がする。その中でも、安全標語などは、高速道路の頭上に大きく掲げる価値があり、同じ句が場所を変えて全国に現われてもよい性格のものだ。

標語作りは「修身」の見出しみたいだが、どの工場も安全標語をよく募る。応募者（川柳作家より大勢である）は、「頭の体操」の姿で、鉛筆を構えては思案するが、類句が他にあるとなかうと気にしない。それはそれで安全意識の高揚に役立つし、言葉選びをする実作の場になっていたので、そういう習作はいいことではないか。

さて結論 機械を助手に使って、選句をすることが、金がなくてできない場合と、選者や作者が費用以外の理由で気乗りしないのでできない場合がありそうだ。

出来ないままに二〇〇〇年代に入ったとする。すると、記憶量の知れた「人間」が見せ合って、佳句だ！ といっている川柳はどんな内容のものだろうか。筆法は「柳樽」と同じで二十一世紀の風物が盛られる句であろうか。それとも人間の言語感覚が鋭くなり、読者の方で複雑な内容を連想しうるような次元の高い語句が生れているのだろうか、それとも、その百年前、つまり大正や昭和の句想と同じものが再登場して、そのつど天地人と評

価されることになるのだろうか。要するに、その時代時代の鑑賞者の感受性の問題だということまで片付けられてしまおうである。

いずれにせよ、白紙から句を作り出した新人に「スジがよい」とほめる段階はあってよい。あるいは句会のために短時間に「字の組立て」をして句を作るたしなみのある人も行事を盛り上げるのに必要ではある。しかしそのことと芸術のレベルとは別問題ではあるまいか。かつて（一九四六年に）出された「俳句第二芸術論」も、ここまで書いてみて分るような気持がする。

ところでもし、機械が秀句を何十万句か憶えるシステムが実現したら、川柳は（とくに標語は）作句というより鑑賞をするものになるのではなからうか……ベーターベンや滝廉太郎の音楽のように。

【訂正】12月号「川柳太平記」記事、終りから11行目「明治も半ばすぎ」の明治を大正末と訂正。

私が思うには、実生活での利益という点で標語の類がまず登録と検索に使われる可能性がある。五七五調の標語もあるが、古来もつと短い警語、寸言が愛されてきた。というこ

素直

江口度選

素直さが取柄だんだん偉くなり
母なれば子の素直さを疑わず
素直さに握った拳ほぐされる
百円を拾い素直に子は届け
素直な字消されてしまふ世相
素直な心もて余す日もあつて
親切は素直に受けて輪をつなぐ
温室が素直にさせぬ花の種
素直さを除けば取得のない私
花と居て素直な心とりもどし
貧しくもみんな素直に子が育ち
素直にも頑固にもなる家の嫁
都会の灯素直な人が罨におち
素直さを職場と家で使い分け
原子の灯今日も素直に闇てらす
騙されても母は素直な返事です
お見合につける仮面は素直なり
妻の手にもつれた毛糸素直なり
素直さの中に心棒しかと持ち
どうしても素直になれぬ野茨で
素直にはなれぬ独房夜の底
素直なら素直でしげきほしい慾
病人が素直になつた胸さわぎ
どなられる度に素直さ消えてゆき

三五島 久仁於 どんたく 規不風 哲夫 不二 多賀子 優 虹 江 優美也 正敏 三吉 芳水 勝一 規不風 重人 勝美 芳子 美穂 甲子郎 景子 宵明 七面山

素直にはなれず自戒の靴をはく
洋服のように素直にするお菓子
三面鏡今日は素直でなかつたな
紅さして心の中をみせている
毒舌家叙勲素直に受けはつた
くせのない打法がコーチの目に止る
素直だが線が細いと親の欲
素直さが戻るに少し待つ時間
諦めに似た素直さが気にかかり
先生の記憶に薄い素直な子
髪までも素直ですなとほめ上手
素直には酔えぬ酒です妥協です

洋々 重人 重人 柳子 ゆう也 裕 実 早苗 胡頹子 哲寿 柳五郎 洋々

エプロン

小笠原有里選

エプロンであわてて隠すつまみ食い
母さんのエプロン借りて発表会
エプロンを洗いざらして名コック
エプロンの妻には負けぬ料理好き
下積みの愛でエプロン悔はなし
エプロンニしゃもじを持って主婦のデモ
白エプロンきりりと七難隠される
エプロンもかくしきれない娘のお腹
エプロンに内緒包んで追っかける
妻病んでエプロン少しずつ馴れる
エプロンが白い奉仕の二重橋

富子 すみれ 四郎 優 婦美子 みつる 規不風 達一郎 可住 早苗 裕

大将が素直で安心しておれず
素直さが取柄で養子向きに出来
素直には聞えぬ針を吞んでいる
ガイド今日素直な客で物足りず
すぐ曲る釘の素直さもて余し
ふるさとを素直に守る鎌を研ぐ
素直さを挽めたわめて鉢の松
あの人へ素直になろう冬がくる
あまりにも素直で叱る種もきれ

可住 軒太楼 里風 浪速子 伊津志 木魚 掬治 義美

ハミンクの朝エプロンがよく似合い
エプロンを捨てて女の落ちてゆく
給食のエプロン男子負けていず
エプロンが鍋を気にする電話口
立話エプロン女の見栄をきく
魚市場鱗が跳ねるゴムエプロン
掃除婦のエプロン一人の子が育ち
エプロンを外して母にせる乳房
給食のエプロン姿まてに見え
エプロンのポケットにあつた探し物
父さんのエプロン材料高く付き
エプロンのパパを見直す妻の留守
呼鈴へはずすエプロン慌てさせ
エプロンの汚れ気になる及び腰
エプロンのポケット嬉したり秘め
エプロンの腕で押売追い返す
エプロンをはずしてはしゃぐ妻の旅

一路 掬治 新一郎 美穂 正敏 右近 三五島 素石 義美 秀峰 代仕男 勝美 幸一 柳子 春草 公一

巢

大塚豊生選

エプロンを着てから献立考える 久仁於
 あかぎれの手をエプロンの裏に置き 佳雲
 エプロンの夢がだんだん小さくなり 凡太郎
 返したい言葉もエプロン包み込み 大柏
 エプロンをはずせばどつと出る疲れ 悠泉
 佳
 エプロンをつければ主婦の座が決まり 多賀子
 エプロンへ握手求める浮動票 軒太楼
 エプロンの下で浮気の虫を飼い 洋々
 炊き出しの主婦エプロンでよく喋り 圭介
 エプロンで涙を拭いてまた耐える 宵明
 人
 背信の疼きエプロン白すぎる ゆう也
 地
 エプロンの妻の演技にだまされる 里風
 天
 待つていた乳房へエプロンやっ取り 芳子
 軸
 エプロンに愚痴を包んで母笑顔

平和来て艦の棲家に稚魚が群れ 雅風
 善人の軒につばめも巣をつくり 本蔭棒
 巣にあってひな食欲に餌を待ち ろ亭
 巣に帰るコース忘れぬ千鳥足 どんたく
 クモの巣に芸術をみる山の道 四郎
 巣作りを急ぐ二人の貯金箱 佳雲
 愛の巣が手狭になった子が二人 素身郎
 手料理の温みが愛の巣温める 多賀子
 転校児ふつと古巣を恋しがり 登美也
 メルヘンの夢が翔んでる巣箱かけ 胡頑子
 巣に眠るたくらみもなく主義もなく 早苗
 巢の中の雛は裸で口ばかり 掏治
 夕焼けてどこに巣があるのかカラス 不二
 みの虫の巣籠り風も計算し 与根一
 巣だつ雛見とられ風にたち向かう 代仕男
 巣に帰る鳥は寄り道などしない 浪速子
 夢抱いてだいて古巣へ錦着る 喜醉
 渡り鳥地球の裏にも巣を作り 芳水
 愛の巣へ住めぬ女の独り言 重人
 万年床クルツとたたむひとりの巢 登美也
 愛の巣を母がひよっこ覗きに來 三吉
 くもの巣のここにも生きる城があり みどり
 巣作りへつばめが戻る春の風 カズエ
 巣に帰る女十字架負うたまま 美穂
 蜘蛛の巣の小蝶の涙を風が見た 日枝子
 巣を出れば女翔べるといふ誤算 柳子
 放浪の末は妻子のいる古巣 景子
 校門を巣立ってからの運不運 勝一
 親と子の巣のぬくもりにある絆 久仁於
 愛の巣の窓に布団が干してある 伊津志

巣ごもりのように炬燵の三カ日 重人
 台風一過くもの巣までも張り直す 里風
 佳
 汗臭い男が戻る釜ヶ崎 優
 鶴の巣の掛軸今年もお目出度い 柳子
 巣立ちするひとりひとりが他人めき 宵明
 帰巣性信じて門灯まだとめき 洋々
 憂さ晴らす止り木がある男の巣 哲寿
 人
 病巣にメス手遅れにまだならぬ 一路
 地
 巣立つ娘へ持たす喪服にある別離 可住
 天
 巣に帰る鳩少年を信じ切る 軒太楼
 軸
 愛の巣を築く荷札にペン走る

謹賀新年

中村ゆきを

柴田英壬子

あすなる川柳会

初歩教室

題——期待——

本田恵二朗

句の種を探し求めて三十年

こんな句を生み落してから早くも十年近い年月を経過したことを思うと感無量である。

古人は『藪かぬ種ははえぬ』という簡單明瞭で且つ意味深長な名言を吐いている。川柳の種も藪かぬばはえないに決っている。手品とか奇術にも種がある。種があるから手品があると云つてもよいが、この種はまんまとだますための種であるので、川柳の種とは異質のものであることは言つてもよい。

川柳の種はあくまでも純良でなくてはならない。そうあらねばならぬように運命づけられているのである。だから一生懸命に純良種を探し求め続けなくてはならない。純良種とは換言すると「愛情」と言えると私は永年信じ続けている。

もしかして親の期待が大きすぎ
(親の期待もしやもしやが大き過ぎ)
山久

連休に孫の声待つ里の母
見るまでは期待している通知表

康恵

ふみ

(見るまでは期待していた通知表)

冷やかに新婚期待する悪友

芳枝

やすお

(冷やかにしてひやかにして新婚期待され)

たたかれた肩に期待を負う入社

同

同

(肩ボンと期待をされる新入社)

神童が期待外れで落ちこぼれ

公乃

勝美

(神童が期待外れで落ちこぼれ)

新婚の期待金婚式までも

同

三五島

(新婚さん金婚式までもと期待され)

マスコミの期待が外れ二軍落ち

保夫

同

平社員の子にそこまで期待せず

同

同

(二期待に添えず笑くほでお断り)

期待した守る命の灯が細く

同

同

(期待した命を守る灯が細く)

期待した生放送を見損ない

義美

同

期待した三番打者が空を振り

同

茂美

期待したお見合い相手気にそます

貞子

同

(期待したお見合い相手気にそます)

期待した顔に少ない奉賀帖

同

同

期待する心に春の風が吹く

千子

同

(期待秘めた胸にそよ吹く春の風)

期待せぬ心に思わぬ虹がたち

同

同

蓋あけるまでは期待を失わず

村諷子

同

この秋は大輪咲かす根分けする

同

同

(ことしこそ大輪咲かそう根分けする)

期待した息子の成績中位

同

同

期待した松茸出ない京料理
(期待した松茸見えぬ京料理)

同

同

ルーキーが期待に応えた大アーチ
あきらめていても若しやを期待する
(諦めの裏に若しやの顔が浮く)
期待したほどでなかった決算期
商談へ期待はずれた舞う枯葉
(期待はずれの商談へ枯葉舞う)
期待するほどではないが熟れてきた
アルバイト塾へ行く児に期待する
(アルバイト塾へ行ってゆく児が期待させ)
三浪へ期待大きく崩れかけ
(三浪へ期待大きく崩れ落ち)
期待せず待つて欲しいと子に言われ
期待通り三葉葵御紋章
(期待通り葵の印籠籠り出る)
期待したほどに漢方効きもせず
期待して来たがお味はもう一つ
期待して父には済まぬ選んだ道
(期待して父にはすまぬ道を選び)
平和への期待裏切る核の貌
それぞれの期待を肩に子ら巣立つ
(それぞれに期待背負って子等巣立ち)
期待する息子のんびり釣りばかり
(期待する長男のどかに糸を垂れ)
期待するひいき力士に土がつき
期待する方が無理です雀の子
(期待する方が無理だよほよほよ)

同

同

期待する方が無理です雀の子
(期待する方が無理だよほよほよ)

同

同

期待する方が無理です雀の子
(期待する方が無理だよほよほよ)

同

同

改組閣前にそわそわ期待鎮

期待などとうに捨てたと母の愚痴

期待して迎える夜明けが素晴らしい

(期待して迎える朝の陽が燃える)

(初日の出今年の期待が燃え上る)

期待せぬ男が嬉しい誤算生み

米の出来期待外れと何時も言い

(米の出来期待外れと言いたがり)

(期待にそえずダルマも目が入らず)

(期待にそえずダルマの目が白い)

留年が親の期待へ水をかけ

(期待に添えぬ言葉に張りがない)

(期待に添えぬ言葉を口ごもり)

両肩に期待をになうランドセル

(ランドセルに期待どつさり詰め込まれ)

期待せぬ三男坊が成功し

(期待せぬ三男坊が成功し)

自画自讃日曜大工の腕ふるう

(日曜大工口ほどでない腕だった)

会えるかも期待も淡い秋の空

(会えるかな淡い期待の流れ雲)

元神童期待したほど出世せず

こつち向いて欲しいお方が振り向かず

ちちははの期待を負うて児が生れ

(ちちははの期待を負った呱呱の声)

ひと言で期待崩れてゆく怖さ

ある期待胸に輝く星となる

ついてゆく肩の広さへ期待する

坂かねばならぬ期待を背負され

(坂かねばならぬ期待を重く負い)

同 元江

同 柳五郎

同 芳水

同 武太

同 武水

同 美智子

同 凡太郎

同 同

同 同

同 同

ご期待に応えて泳ぐ鯉のぼり

期待から期待へ長い虹の橋

期待して悲しい目には会いたくない

(期待をし過ぎてうき目を見たくない)

追い越した背丈に期待したくなる

一坪の庭に期待の種を蒔く

期待した運がそっぽを向いていた

大物になるぞ大きな呱呱の声

金のを射止める期待の矢をつがえ

指三本折って卒業の子へ期待

吉報を期待おみくじ引いてみる

期待する子には重荷と知らぬ親

出漁する期待の朝が晴れ渡る

見るだけと云うた見合に期待する

期待などしてはいないよと期待され

組閣当初だけは期待をしていたが

次の子に期待をかける岩田帯

糸切った脈の行方は期待せぬ

花束を抱いてひそかに期待する

音もなく期待はずれの指の冷え

前髪のあたりに期待ゆれ残る

振り向かぬ背中秘めている期待

期待一つ明日の首尾の中に組む

期待するあすお冬の夜長すぎる

期待する返事がおそい胸さわぎ

だんだんと親の期待へ遠ざかる

秋風へちよつと期待の紅つける

同 健司

同 昭代

同 句味地

同 利美

同 風童

同 瓢太

同 英子

同 寿子

同 佐代子

同 同

題一 図星 一月20日締切(3月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

本田恵二朗

'82 頌春

川柳塔柳箋

一冊二百円
送料二百四十円



大 萬 川 柳

「最 終」 入 選 発 表

選 者 川 村 好 郎
投 句 総 数 三 百 二 十 一 句
入 選 四 十 九 句

最終を女の意地で飾りたい
寢屋川 あいき

最終回枯葉一枚舞い落ちる
度 寢屋川

最終の粘りへ風も押しつけてくれ
大阪道子 米子千代

切札の味終幕を締めくくる
三重 水 三重 水

最終のチャンスを狙う武者ぶるい
尼崎 利美 尼崎 利美

有り金でこれが今年の飲み納め
今治 三五島 今治 三五島

たんたんと最終回が迎えられ
旭川 大 柏 旭川 大 柏

とどめ刺す棋譜はゆとりの音で鳴り
東子 悠 泉 東子 悠 泉

ファイナレを飾る夕日が美しい
米子 雄 々 米子 雄 々

最終にそろそろしたいロッキード
貝塚 千 代 貝塚 千 代

最終に乗ると無理矢理帰る人
岡山 金太郎 岡山 金太郎

実力の違い最終に見せつける
今治 佳 雲 今治 佳 雲

最終に出す切札を温める
岡山 いとよ 岡山 いとよ

最終まで牽制球は出さぬ妻
高知 三 吉 高知 三 吉

最終回までをほらはらするページ
堺 一二三

ファイナレの幕を拍手がおろさせず
はじめから最終案がある金庫
大阪 智 子 大阪 智 子

最終便見送り女もう泣かず
最終のページに辞世の句を残し
松原 重 人 松原 重 人

最終はボックリ寺にまかしとく
最終になって本音が出始める
會 敷 素身郎 會 敷 素身郎

夫婦仲最終的には僕が折れ
最終回悪の栄えたためしなし
佳 句 佳 句

最終の球に女神が乗って来る
米子 な み 米子 な み

最終のバス車庫前で降ろされる
和歌山 英 子 和歌山 英 子

最終で出かける父の釣り仕度
大阪 静 子 大阪 静 子

最終でどんでん返し欲しくなり
西宮 婦美子 西宮 婦美子

それぞれのさよならを持つ終電車
八尾 美 幸 八尾 美 幸

最終のランナー拍手が重すぎる
兵庫 忠 夫 兵庫 忠 夫

地ノ句
高知 三 吉 高知 三 吉

大阪新 一
大阪好 一
なりゆきに任ず最終案もある

大阪幸 子
最終はやはりキャリアと云う強み

鳥 取 秋 女
最終の回答となる咳払い

米子 田 鶴
最終を飾るにはしい嘘すこし

米子 みど里
ファイナレの余韻にひたるもどり道

和歌山 武 雄
これからと決めた便りにある未練

倉 吉 弘 朗
終止符を打って余韻をたしかめる

兵 庫 忠 夫
最終で一泡ふかす策を練る

最終だと行ってからが長い酒
骨抜きにされて最終案可決

大阪弘 生
最終回で同点女神は浮気者

大阪美 恵
最終の電車は始発に出る電車

大阪 満 津 子
最終のことは飾らぬ有難う

枚 方 弘
宝くじ今年最後の夢を買う

大阪 倫 子
最終で飛ぶと切迫した電話

守 口 静 歩
極楽も地獄も乗せて終電車

西 宮 婦 美 子
最終の電車まつ毛がずれている

平 田 代 仕 男
最終案まとめ妥協の線とする

東 大 阪 没 食 子
骨抜きにされて最終案可決

フィナーレを待つ天井の紙吹雪

天ノ句

熊本芳仙

誰が押す地球を灰にするボタン

昭和五十六年度

大阪文化祭川柳大会(56・11・21)

◇佳句3句、秀句の順

ベストテン決定

一 一三梅里賞 二二・五 堺

二 花梢 里賞 一七・五 富田林

三 君子 一七・五 大阪

四 三吉 一六・五 高知

五 美幸 一五・五 八尾

六 寿子

七 千代

八 好一

九 秋女

一〇 道子

一 雄

貧乏な道で頑固な父に逢う

道決めた子の置手紙通信しよう

兼題 有

有力なコネお父さんありますか

自転車を一台中は置ける庭が有る

有名人家に勝てない妻がいる

日射しが有って冬の土管は転がされ

兼題 時事雑詠

十二月踏まれた足の痛いこと

ころがった銀貨はたしか五百円

早口に読んで楽しいトットちゃん

ロケットが押すかも知れぬ核ボタン

兼題 鳥

少年が病んで巣箱に鳥がいる

翼切られて雪の白さに泣きつくす

友達をうらんでいないはぐれ鳥

梟が鳴くと童話の夜は温い

兼題 解禁

酒たばこ大きな顔で満二十

解禁の朝狐銃の音で明け

解禁のカニ漁村の湯がたぎり

岳人

桐下

栗選

勇太郎

喜代志

憲祐

作二郎

反省選

美左

古啓

邦晴

豊太

墨作二郎選

湖風

良子

堯亘

元紀

久保田以兆選

藤吉

源次郎

邦晴

あき子

一四・〇 和歌山 一二 武雄 歌音 一一・〇 和歌山

一三・五 米子 一三 満津子 一〇・五 大阪

一四・〇 鳥取 一四 みど里 一〇・〇 米子

一五・〇 鳥取 一五 智子 一〇・〇 大阪

一六・五 大阪 一六 重人 九・五 松原

以下略

川柳塔常任理事会(12月1日)

(出席者) 栗・水客・薰風・形水・潮花・紫

香・柳宏子・与呂志・醉々・鬼遊・吸江・史

好。

▽議事並に報告事項△

★川柳塔二百号記念川柳大会を四月四日(日)

に行うことになり、詳細は別稿社告のとおり。

阪急グラントビルという豪華な会場にふさわ

しい立派な大会にしようとして盛上っている。

(記録・史好)

▼1月の常任理事会はお休み。

席題 埋める

骨を埋めよう上げつない井池に

シベリアに父の怒りが埋めてある

手錠の土合わせて涙埋めた場所

記念樹の土は陛下のお手を借り

席題 無

情の無い人が財布をおいてゆく

明日の荷は何か無気味な無蓋貨車

駅前で渡す無実と書いたビラ

無一物無尽蔵落葉しきりなり

兼題 窓

窓あけて風の子言をきいてみる

ひっそりと女系が続く格子窓

騙されてまだ善人の窓を持つ

それぞれに帰る果があるビルの窓

兼題 道

商魂や真直ぐに道歩かない

蛇使いは死ぬまで蛇を友として

磯野いさむ選

三 窓

湖 風

三 良

秀 敏子

橘 高

薰 風選

慶 三

万 彩郎

静 歩

永 田

帆船選

久 子

醉 々

漱 憲

岸 本

三 窓

六 寿子

七 千代

八 好一

九 秋女

一〇 道子

一 雄

貧乏な道で頑固な父に逢う

道決めた子の置手紙通信しよう

兼題 有

有力なコネお父さんありますか

自転車を一台中は置ける庭が有る

有名人家に勝てない妻がいる

日射しが有って冬の土管は転がされ

兼題 時事雑詠

十二月踏まれた足の痛いこと

ころがった銀貨はたしか五百円

早口に読んで楽しいトットちゃん

ロケットが押すかも知れぬ核ボタン

兼題 鳥

少年が病んで巣箱に鳥がいる

翼切られて雪の白さに泣きつくす

友達をうらんでいないはぐれ鳥

梟が鳴くと童話の夜は温い

兼題 解禁

酒たばこ大きな顔で満二十

解禁の朝狐銃の音で明け

解禁のカニ漁村の湯がたぎり

岳人

桐下

栗選

勇太郎

喜代志

憲祐

作二郎

反省選

美左

古啓

邦晴

豊太

墨作二郎選

湖風

良子

堯亘

元紀

久保田以兆選

藤吉

源次郎

邦晴

あき子

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

■小松川柳社では、合同句集「あすなろ」を発刊。A5判変型21ページ。非売品

伊藤茶仏、岩本雀踊子氏などの作品がある。
一坪の庭に住みつく道祖神(茶仏) 漁り火に帰らぬ父の墓がある(雀踊子)

■飯塚番傘川柳会では、第一回近江砂人句碑まつり及び飯塚文連創立15周年記念句会を11月3日飯塚文化センターで開催した。

■藤島茶六氏傘寿を祝う会が12月13日東京都中央会館で開催される。

■岡崎川柳研究社創立30周年記念川柳大会が、11月29日岡崎労働文化会館で挙行された。

■昭和五十六年版北海道川柳年鑑が発行された。A5判168ページ。二千円。発行所T003札幌市白石区平和通り5丁目北11-1宮崎宏陽方・北海道川柳年鑑刊行会。

■川柳公論では80年度の公論賞を次のように決定した。

平和論ばかりと音のする涙(千島鉄男) 今日を生きたどれほどの価値夕陽みる(鹿山敏子) 堂々と闇に座つて爪を切る(山本忠次郎)

■かもしか三賞(80年度)は次の通り決定。
見よ稲の芯まで冷えの詩に染まる(村立秋善) 証拠溼減やがて柘榴の実が熟れる(佐藤幸子) 折鶴の千には遠い冬の指(野沢行子)

■柳都(11月号)には、全日本川柳大会壇上座談会の各発言者の要旨を採録してあるが、有意義な企画である。

■島根県川柳協会では、第11回島根県川柳作家大会号「しまね」を発刊した。

■尼緑之助氏選の特選作品は、「知恵のある味方が仇の内輪もめ」津川紫叟

■川柳塔島根県同人会(会長・尼緑之助氏)は11月29日松江市労働会館にて開催多数同人が参集した。

■出雲市文化祭第3回出雲

市川柳大会は、11月22日出席市民会館にて挙行、盛会であった。

■白百合川柳社主催第16回岡山県川柳大会が、左記要領で行われる。

日時 57年1月17日(日) am9時

場所 岡山県邑久郡邑久町中央公民館(国鉄赤穂線邑久駅より歩いて5分)

兼題 釘 西尾 栗選 炎 去来川巨城選 安らぎ 田中 好啓選 美人 桶高 薫風選 仏像 寺尾 俊平選 満願 森中恵美子選 陸橋 平山 繁夫選 叱る 浜野 奇童選 多弁 長町 一吠選

席題 当日1題発表 特別席題 当日1題発表 (全部に呈賞)

会費 千円(発表誌・参加賞・昼食呈す)

投句規定 縦22cm横4cmの句箋、投句料五百円を添えて1月15日迄に必着のこと

たいしょうの会

(イロハ順)

鳥本泰 榎谷寿馬 高杉鬼遊 室田千尋 越智智禎 寺尾俊平 光森良 森本夷一郎 代表幹事 岩井三窓 中尾藻介 橘高薫風

応募作品は各題2句以内
投句先 Ⅱ 下701-42 岡山県邑
久郡邑久町山手1116 嘉
数幸栄宛

▽同人・柳友消息△

▼宮口笛生氏(奈良市)ご
尊父様去る11月5日長逝
お見送りに岩本雀踊子氏、
村上春巳氏、森田カズエさ
ん他多数の柳友諸氏が参列
された。

▼福岡淡舟氏(枚方市)去
る10月2日逝去。享年70歳。
遺句 Ⅱ 思ふこと更らに無し
大往生。合掌。

▼野田素身郎氏(倉敷市)
術後の経過良好で自宅静養
中のこと何よりである。

▼黒川紫香氏(尼崎市)甲
斐路を辿られた由。旅信拝

受。

▼京都塔の会東福寺吟行句
会より寄書拝受。

▼工藤甲吉氏(青森市)路
郎賞準賞受賞の喜びを本社
へ寄せられた。

▼齋藤三十四氏(東大阪市)
目下高血圧にて静養中の由
一日も早い快癒をお祈りす
る。

▽句会案内△

■菜の花句会

時・1月10日(木)夕6時
場所・西郷会館(八尾神社
境内)近鉄線八尾駅下車
兼題 Ⅱ しあわせ(西尾菜)
犬(香川酔々)茶碗、地図、
大阪風景。

■東大阪川柳同好会

時・1月23日(土)夕6時
場所・東大阪中央公民館
兼題 Ⅱ 誓う、造る、訪う、
ドラマ。

■駒つなぎ川柳会

時・1月25日(月)夕6時
場所・寺田町高松会館(環
状線寺田町駅下車)
兼題 Ⅱ 出発、顔合わせ、友
進む。

■南大阪川柳会

時・1月18日(月)夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題 Ⅱ 神、奇、組、計、子
■南海川柳部

時・1月21日(木)夕6時
場所・南海会館ビル本社地
下食堂

兼題 Ⅱ 住吉さん、ブーム、
アドバイス。

新同人紹介

中 川 幸 一

― 緑之助・軒太様推薦 ―

本社 十二月句会

会場 金属会館
七日 午後六時

十二月句会といえは恒例の齊藤三十四氏の木彫りのチャリテイバザーが、今年はお忙しくて数が揃わず、天位入賞者のみにご寄贈になった。少々がっかり。初出席は林はつ絵さん(西宮市)、宇藤泰伸氏(大阪市)、それに川雜時代以来という佐野白水氏(羽曳野市)が十五、六年ぶりに顔を見せられた。

おはなしは香川酔々氏。どんぐり川柳会からの長いつき合いが、改まって話をきくのは初めて、果して何を喋るのか、実は予告発表以来楽しみ半分、心配半分であった。テーマは「数」のはなし。年賀状に必ず数のお遊びを書いているのは、存知のとおりでこれは氏の専門分野。黒板を使ったの堂に入った話に久しぶりに生徒に返った気持であった。

本年棹尾を飾る月間賞は高橋千万里さんに輝いた。

(史 好)
(受付)与呂志・重人
(進行)柳宏子、記録・重人

出席 岳人・与呂志・翠光・雅風・勝美・喜一郎・潮花・滋雀・好子・甘平・健司・敏・白水・憲祐・栗・水客・吐来・喜風・英子・アキラ・川狂子・鬼遊・重人・悦郎・富子・トメ子・薰風・瓢太・蘭・小路・千万里・右近・はつ絵・幸太郎・規不風・桐下・吸江・幸・太茂津・文秋・静歩・頂留子・女・柳伸・柳宏子・涼一・史好・泰伸・二三・醉々・寿子・凡九郎・形水・千代三・綾珠・三十四・武太・元紀・満津子・道子・寿美子・射月芳・山久・君子・登志代・度・萬的・雀踊子・白兔・鎮彦・美智子・智子。

席題「十二月」 里 小路選

十二月今年も宝くじを買う
十二月開き直っているタバコ
荒巻が逆かさににらむ十二月
十二月それでも女の厚化粧
十二月の女で化粧忘れてる
十二月ピエロの顔に馴れてくる
十二月妻も悪女になってくる
ピエロ廻り十二月のドラマ抱く
ひねかぼちゃに一番があった十二月
ゴキブリを殺す間もない十二月
正月がもうそこに来た胃弱
ヤシロベーも金へ傾く十二月
十二月なにもあわてる事はない
十二月の風を聞いている球根よ
十二月尻叩かれるよなりズム
十二月ころは初春を向いている
大晦日の無い十二月が欲しい

吐来 智子 醉々 英子 智子 水客 幸 憲祐 千代三 柳伸 萬的 健司 悦郎 柳宏子 滋雀 桐下

来年の十二月まで組むスケジュールはみ出した男が飢える十二月
十二月いつも同じ財布です
十二月子供の寝息聞いている男と女 夫々にある十二月
煩惱具足どうにもならぬ十二月
十二月隣を真似ることはない
十二月母は少うし若くなる
これ以上とほけておれぬ十二月
諦めた五十日(ごじゅうび)はり十二月
深呼吸一度も出さぬ十二月
十二月母のふりがせわししない
十二月某日巡査にふり向かれ
ロロホロの軍手を脱いだ十二月
札束がみんな帯と音でくる
十二月風も白刃の音でくる
首塚は傾いたまま十二月
釘を打つ早さが違う十二月
ホーナスを握った妻の十二月
十二月の自画像がふところ手をしてる
母と子の暮しに小さい十二月
閑節ががたついて来た十二月

席題「自由」 高木幸太郎選

美しい自由を聖書が持っている
自由が欲しくて拘留所を憧れる
見るだけの自由到店員つきまとい
少しだけ自由になれた十二月
手を挙げぬ自由おとこに残される
自由の身当分監視だけは付き
不自由な足だが定刻遅れない

幸太郎 雀踊子 凡九郎 水客 吐来 翠光 智子 吸江 雅風 千代三 雀踊子 静歩 憲祐 滋雀 醉々 健司 与呂志 桐下 悦郎 小路

自由の女神炬火がくすぶっている
 プラットホームに行つと自由になれそうて
 めいめいのポーズへ戸惑うカメラアイ
 エリートとしての自由を考える
 自由業あんまり金にこだわらぬ
 人好しの自由は小さな粹の中
 不自由な肢体を持つて知る感謝
 ロードショーいつもの自由席を賣つ
 自由意志と云う寄付帖にあるメンツ
 自由謳歌オールドミスに金がある
 束縛の中の自由にある平和
 觀光バス自由時間も分刻み
 スタートに立つ時自由捨てている
 飼いだの自由は鎖で丸を描く
 自由を叫ぶと銃口的になる
 やがて自由の虚しさを知る放浪記
 自由とはデイスコで狂う朝ぼらけ
 空想の自由アニメの中にある
 世の中も知らぬ若さで自由です
 何かしてないかと自由逃げそうて
 記者の自由が新聞記事の裏にある
 山へ行く父の背中にある自由
 コーヒーの底に沈んでゆく自由
 つんば機数はとも自由な風が吹く
 窓ぎわの自由に悲しみばかりある
 女ひとり自由な城にある鬨り
 ひとりに居てひとりばつちという自由
 サハリンへ自由に渡る雁の列
 山男神の自由へさからわず
 のんびりとしている自由が不自由で
 自由画も矢張り黒が好きなの孤児

寿美子 智子 英子 幸子 千代三 瓢太 萬三 桐秋 文秋 涼一 柳宏子 萬的 英子 憲祐 雀踊子 幸子 涼一 滋雀 白水 富子 大茂津 岳人 女々 醉々 滋雀 幸子 寿美子 憲祐 静歩 萬的

表現の自由の中にもあるルール
 三分の自由へ生きている砂時計
 つかの間の自由を飛んだシャボン玉
 小春日は自由がほしい妻の靴
 ふところにあるが自由にならぬ金

兼題「音」

河野君子選

敵の目を暗ます音は派手にたて
 住む世界違ふ音ですヘッドホン
 冷戦が隣の皿も割れる音
 みおつくしの鐘ちの音ははの音で鳴る
 雑音もあつて落ちつく都会人
 中流の意識で妻がたてる音
 音すべて消えるが如し除夜の鐘
 娘の掃宅待つ夜は聞える風の音
 音のない世界へ指話の輪がはずみ
 騒音やおまへんあれがミュージック
 足音は意中の人の音で来る
 滝の音自己主張が止められぬ
 ボーナスマも出ましたレジの音しきり
 関白の孤独は妻の音がない
 秒針が命の音を読んでいる
 信じてた愛のレールのきしむ音
 立腹の音掃除機がはじき出す
 悪人の音とは知らぬコンピュータ
 小さい音払い落した猫の耳
 風の日は風の音なる父の声
 とはいへど気の狂いそな無音室
 病床で聞く一日の町の音
 しのび逢う離れの庭のししおとし
 台所細ぼそ生きる音がする

勝美 憲祐 滋雀 智子 幸太郎 軒太楼 大茂津 憲祐 桐下 文秋 白兔 吸江 道子 柳宏子 凡九郎 翠光 水客 好子 文秋 雀踊子 女々 吸江 重人 鎮彦 智子 吐来 涼一 蘭

56年度本社句会全出席者

宮園射月芳・飯田悦郎・横地雅風・北勝
 美・高杉鬼遊・米田喜一郎・山本規不風
 清水健司・梅原憲祐・二宮山久・西尾葉
 玉置重人・那須鎮彦・岩本雀踊子・正本
 水客・香川醉々・荻田川狂子・板尾岳人
 若柳潮花・荻田千代三・藤田頂留子・山
 本桐下・塩満敏・上田翠光・金井文秋・
 阿萬萬的・西田柳宏子・松原寿子・松本
 涼一・児島与呂志・江口度(31名)

音みんを消してひとりの部屋にする
 むかし昔師走の街の下駄の音
 低音になつてお金を貸してくれ
 騒音の下で無心の乳母車
 音のない風呂場へ声をかけてみる
 星一つ音なく消えた空虚感
 豪快な太鼓に悩みふつ切れる
 セコンドの今を刻んで悔いはない
 不協和音として存在を悔いとめられ
 米びつに米みたまされる音やよし
 組板のくぼみにたまる母の音
 折鶴の静かに疼く羽根の音
 雑音の一つが胸につき当る
 貯金箱に音あり心飢える日よ

兼題「指」

笠原吸江選

雀踊子 栗太 柳子 英子 寿美子 度 柳伸 滋雀 水客 鬼遊 雀踊子 幸子 はつ絵 君子

げん骨をほぐすと五指が悔いをもつ 雀踊子

ふるさとがこんなに近い日本地図
近過ぎて心の奥が読めない
裏切ると刃が背な近くに
近いというだけで寄道頼まれる
海鳴りが近いので母に逢いにゆく
組長の家が近いと流れだま
雨雲が近づき罪をきせられる
どんじりに近く男は走らない
近所ではエタイのしれぬ人と云う
放つとけば近い所で噂され
時効くる日が近い風が鳴る
ふる里が近くで出世の絵がかげぬ
御近所に敵も味方もいる世相

兼題「決断」

橘高薫風選

決断をしたのではないハズミです
決断へ黙って席を立つ
決断は通天閣のてっぺんで
決断と天秤かけてる預金帳
決断をしたのは胃カメラ飲んでから
影武者は決断力をもっていない
入院の決断その場でさせられる
なるようになる決断頼りなし
決断へ妻の意見も一寸借り
辞職する決断してから物が言え
決断してからパチンコ入り出す
猫の髭抜いて決断まだつかず
末席から決断つける温い声
決断してトコを握って貰います
決断を許してくれた父の墓
決断に迷い四五日楚々と生き

桐 下
太茂津
涼一
柳宏子
白兔
健司
柳伸
水客
凡九郎
与呂志
太茂津
度
雀踊子
凡九郎
萬的
英子
道子
規不風
眉水
綾珠
甘平
静馬
吸江
一二三
登志代
醉々
重人
吸江

決断が出来ず笑つてばかりいる
歯医者へ行く決断まで三月要り
決断をおキツネサマはノーと言つ
決断をするのはいつも妻である
どたん場で決断くずれ出すことも
決断の場がない男くしゃみする
決断をしたらしい瞳が真正面
二階から下りる決断まだつかぬ
決断をさすのに札束つけて来る
決断がにぶつてきます隙間風
決断へ小さな虫はころされる
決断をした一瞬は空になる
決断がにぶい男のしゃれた服
決断ついたのか最後の葉が落ちる
決断を促すように雪が舞う
決断を下すと檸檬はレモン色
決断は一杯のんだからにする
決断を下すボタンを掛け直す
決断をしてから腹が痛くなり
決断を話した男が美しい
決断の浪士に雪が舞い狂う
決断を相手は知らぬラブレター
決断の高さに札の束を積む
少年の決断卑屈な父を見て
決断の兜をかむる顔になる

幸
綾珠
重人
鬼遊
幸太郎
寿美子
アキラ
太茂津
花梢
健司
雀踊子
射月芳
千代三
白兔
軒太楼
智子
栗
智子
健司
白兔
鬼遊
雅風
一二三
千万子
薫風

★
【訂正】12月号一路集「限度」人の句、及び
本社11月号会兼題「時間」前抜第一句の作者
が「幸」となっていますが、何れも中川幸一
氏です。お詫びします。

各地新聞

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川酔々)

川柳大阪

西岡

洛酔軒

学歴不問私を釣る餌でした
沈黙は金と云うのによく喋る
押し売りの出来ぬ愛情に二歩下る
鏡台に座る女に年齢がない
キナ臭い波に列島ゆれている
懸命に生きよう今日を積み重ね
会ってまた別れて人生旅歩み
エリートの一枚看板かも知れず
文机へ向う背寒う秋深く
同じ顔無いので此の世おもしろい
友情は途切れず逢う日決めてくれ
遊ばせてやれとは父のものわかり
大阪の料理でやっとな旅終る
さすが姉北海道へ嫁く度胸
二代目が頭の上らぬ姉が居る
美しい姉が不思議に売れ残り
小説を真似た事件が又起り
月給をにらんだランクの検査つけ
健康が嬉しい検査の酒となり

六龍子
善紫
ひろ子
蕪詩芽
敏

三十四
秀峰
与呂志
洛酔

みつる
君枝
本蔭棒
笑風

喜醉
弘生
道子
天平

比呂志
雅巢

前山
北海報

川柳ウイロー社

老いながら溢れる勇氣今日の幸
土壇場にこんな勇氣を振り出し
七転び八起き男じゃ勇氣出せ
土壇場の女の勇氣侮れず
花も実もある執り成しに勇氣づき
舞台裏ママが勇氣をつけてくれ
妊娠と聞いたら総身に出る勇氣
原爆に挫けず勇氣日本立つ
好きな娘に勇氣燃してプロポーズ
一目惚れ恋文渡す勇氣が出
おみこしをかつき若さの勇氣見せ
どん底に明日を夢見て勇氣出し
蛮勇をふるい名士も格を下げ
率直に落度認めている勇氣
勇氣出し成し得た事に悔いもなし
応援が勇氣つけてるゴールイン
小づくりな男似合わぬ勇氣見せ
勇氣満々若き日を思い出し

城北川柳会

七五三 一姫二太郎丁度よし
還暦の妻エプロン離さない
緞帳が下りて余韻に浸ってる
最終へそろそろ老いの身纏い
最終が判る踏切番の耳
お賽銭あがらぬ寺は庫裡を貸し
一匹が釣られて隣りも喫うゆとり
題目のないドラマ済む停泊日
お見舞に行ける幸せ秋日和
飛驒の朝どの宿もまた朴葉みそ
ライバルもやっばりついていた吐息
酒の量心配させた頃がよし

川口
弘生報

千代女
健舟
黄塵
風影
嗣栄
歌子
雪女
蒼生
張賀
虹宵
万里歩
紅里
万里歩

公女
北海
三石
山
カロ女
拝山
紅里
万里歩

黄昏れて二人の皿を洗うのみ
銀行は内と外から狙われる
蹴り上げた小石が澄んだ音で秋
エプロンは働く母のユニホーム
おたがいの絵には触れない嫁姑
背景に雪を降らせてみた女
冬至南風嫁と無口の陽が昏れる
決心のつかぬ目に入る割れ栢榴

川柳しんぐう

半分に分けても母は小さい方
冗談半分その半分が許せない
晩学の頭脳半分しびれかけ
半分はさくらが交じるたたき売り
半分が遺稿となって筆絶える
一階も二階も同じ屋根の下
町内の噂は二階に住むおんな
本当の事は二階へ云うていず
倦怠期二階と下で朝寝する
老いた身に二階がだんだん高くなる
セロテープ故郷の空気も詰めて貼る
セロテープ血とどめに使って母多忙
セロテープ邪険な指にからみつき
背伸びしたセロテープだから又はずれ
愛情の裂け目は張れぬセロテープ
参観日うちの子下を向いたまま
社長さん下厚くて社が栄え
下衛生之日ごと可愛い孫娘
一生を下級で過ごし趣味に生き
下の子は勉強好きにしてみたい

川柳ささやま

河原みの報

三和
倫子
美恵
千子
はつ絵
婦美子
千世子
右近

公女
北海
三石
山
カロ女
拝山
紅里
万里歩
虹宵
万里歩
紅里
万里歩

川柳ささやま
河原みの報
法齋

登りつめ下界の雑草へ目がうとく
プロである登ることしか考へず

町長も固くなつて初登庁
お国自慢高い松茸送る羽目

松茸を毎年もらうをあてにして
親指のよな松茸伏し拝み

薄切りの松茸浮いてすまし汁
石投げて肩のきしみに突き当り

投げた石不正をあばく鍵となり
賽銭を投げても届かぬ神無月

太腹の亡夫の燈明たじろがず
万燈の中の一つに母がいる

灯を消した闇に妻いる安堵感
母の灯が消えて倅せ後で知る

尼崎いくしま川柳会 黒川

さつそつと肩で風切るピクニック
じいさんは嫁さんの肩持ちたがり

人形の箱から出た夢がある
丹精の花なら束ねたりしない

負けた男のうしろ姿をみてしまふ
友の訃に花の命を考へる

草原の愛の行方を考へる
犯人の部屋で牛乳瓶がこけ

井戸端に安い野菜の瓦版
秋祭八幡様に手をあわせ

秋の野を駆ける夢みる車椅子
どん底のくらしを知つた思いやり

縫いぐるみ夏に毛糸の服を着て
五ツ子を親は誤算と思つてない

道ばたのお地藏さんも赤い花
秋の暮外灯ひどく淋しそつ

素水

百合子

愛子

宗珠

くにの

ひか平

千代子

テル

貞子

エキオ

和子

文平

ゆう也

靖子

紫香報

すえ

湖澄

メ女

和子

牧郎

迷う気もない年金の細い道
井戸端の乱れ話にすぐになる

虫干しのついでに若き思んでる
鍵つ子の笑いが戻る夜の膳

川柳わかやま 堀端 三男報

抜けられぬ渦が消える日きつと来る
たまたれぬ逢いに運命変えられる

花道を消える背中にある言葉
早朝マラソン今日は何やら拾うて来る

たまたまの幸せ暗刺殺の日が昏れる
合掌の丸い背中に嘘がない

肩書きを取りまく渦と知る不満
戦争の渦に青春置いて来る

全集の背中奇麗なまま並べ
人の世の渦に揉まれて味を出し

完走に意義ありマラソンひた走る
地下鉄の渦から働き蜂になる

唇のさむさを唾う渦のなか
渦抜けて抜けて人間太くなる

煩惱の渦を枕に沈ませる
固い背なほくす言葉の撰りに撰り

生活の渦の中から得たゆとり
渦潮に二人の絆たぬきされる

青春のファイト背中にあふれてる
菜の花句会 高杉 鬼遊報

忘れたい忘れたくない掌を合わす
金になる鐘が鳴るなり天王寺

血縁というだけ顔も名も知らず
神農さんの虎とゆれてる千鳥足

今日も雨ドヤから貰う採血車
伊三郎

幸子

晴子

かすみ

光代

武雄

幸

十郎

太茂津

正博

緑楼

千寿子

英子

勇太

天彦

登記夫

あつむ

弘生

規不風

和子

三千代

善太

球子

かね

柳伸

忘れたい事ばかりです女です
あらそえぬもののひとつに血の流れ

御堂筋一直線に冬の空
悪の血が好きなら主水の居合抜き

赤袴につられ巫子のパートくる
白浜の帰り風邪ひく天王寺

忘れよう明日も太陽のはります
石を積む血のつながらは無いけれど

千日前パチンコの街酒の街
モンローの影が写つた煉瓦塀

シグナルは赤助手席に母を乗せ
通天閣目じるしにして家教え

大観の酒匂いだす赤い富士
仲はどうあれ血の順のお焼香

天牛でうしろ姿の師と出遭い
京都塔の会 松川 杜的報

歯並びを綺麗に見せた娘の欠伸
ハンカチであくび包んでいる女

秋晴れへ長寿の人のいい欠伸
謎かけた子に親わざとだまされる

謎めいた言葉心にひっかかり
謎を解く鍵に仕立てられていた自殺

謎が待つ人に鶴のことごまごまと
鶴飼侍さんで吊橋揺れている

水に浮く篝火くずして鶴がもぐる
篝火の音して落ちる鶴飼舟

このダムも悲劇の謎を秘めている
飲み放題小さな欲を叱られる

萩の露満ち足りた手を濡らす
友の死に我を重ねる年になり

ポストに会うと便り書きたくなつてくる
凡九郎

儀一

鎮彦

鬼遊

昭子

射月芳

健司

糸葉

悦郎

酔々

雀踊子

綾珠

幸生

道子

白溪子

潮花

水客

弘三

美穂

求芽

飛鳥

笛珠

花代子

杜的

芳子

和友

紫香

遊香

美智子

川柳高知

川竹 松風報

家計簿を信じる夫は上機嫌
家計簿へ小さく載せた化粧代
箸箱を鳴らして職場の昼にする
編針は何時も許してばかりいる
バス停を二つ歩いた淋しい日
早すぎる別れ妻に夫のやさしさよ
働らいている妻に六分の無理をきく
齢の順など冷たいことを聞き
新米をもらいにもどる里帰り
猫の手はいらす月賦のコンバイン
落穂拾う手が恵まれぬ過去を持ち
家計簿を乱しただけの夏と知る

駒つなぎ川柳会 里
ほとほとの酒量へ酒のつきこほし
らりるれろしゃべれる程度に飲んでおく
黙々としてベテランの酒の量
酒の量鼻の赤さにかがわれ
ほとほとの酒量と書かぬカッパの絵
酒の量敵は確かに読んでいる
ほとほとの酒量で敵を待ち伏せる
一滴の酒で足りてる遊女墓
過去形は信じた色を塗り替える
無責任無一文なる身のずばら
秋の旅思い叶うて肌と肌
喪の明けた女の肌にあるほてり
まだ若いつもりが肌をなで廻し
やわ肌女と濡れる港の夜
背信の肌に来る黒い蟻
気やすめの言葉が触れる肌の艶
七色の嘘のライトで肌を染め

肌をさすそんな花束持たされる
運命の娘に父の肌の色
お祭りの好きな女の勇み肌
川柳化粧槽
無責任な事は云えないから無口
窓見えただけで嫌気がさす職場
肩書をすたり名刺を出したが
専門の見方は角度を変えて見る
手術後の恐さ忘れた今日の酒
おいと呼びあんだと言われ夫婦こま
夢の又夢でも男は恋をする
日めくりも包んで種が顔を出す
思いやりこもる師節のアドバイス
仇名しか思い出せずに同窓会
けなげにも赤字大会計詫びる妻
交換へしふる小銭を寄せ集め
山彦が返事している愛の唄
わかあゆ川柳会 小砂
新車買ひ足止めにする策を立て
夕映えの句会の帰り満ち足りて
雨を待つ今日も夕焼けじれたい
妙案は妙なことで思いだし
燃えつきて母燃え尽きて陽が沈む
妙案を五つの子に教えられ
善人へも悪人へも月が冴え
紐つきのボールペンのある役所
妙案に釘を打たれる宮仕え
ボールペンやはり明治の意にそわす
賞めておきながら妙案左遷され
夕焼けて芒は長く穂を流す
妙案が出ぬまま瓢箪ぶらさがり

- 規不風 小 路
- 醉 々
- 紅 月
- 秋 詩
- 岳 水
- 實 男
- 葉 香
- 大 鷹
- 白 李
- 富 多 葉
- 多 津
- 越 山
- 三 青
- 客 遊 子
- 白 汀 報
- タケノ
- 秀 穂
- ふ み
- 敏 明
- 志 保
- 清 夢
- 恒 星
- 輝 水
- 美 栄
- 清 泉
- 歳 栄
- 鈴 江
- はるみ

せつなぎよ夕焼空が嘘をつく
虹川柳倶楽部
新岡回天子報

ひきしめた心が守る身の安全
吊し柿すめば冷めたい冬の顔
エプロンの似合う娘で早く嫁ぎ
浮気して道々嘘を考える
エプロンで出征兵士に哭いた過去
ままごとのママは自分のママを真似
数の子の隣りに並ぶ鯨肉
子供だけ責めてはならぬ子の非行
手をつなぎや道も明るい乾電池
ガタガタにふるえる子等の十一月
富田林富柳会 板尾 岳人報

反抗へ大人の眼鏡くもつてる
裏づけがジツと私の眼を見てる
自分から起きた喧嘩と知らずくる
魂のゆとりに出逢う彼岸花
底がない勤忍袋を母は持つ
こぼれ萩風情は掃かぬことにする
陰になり日向になつて怪しまれ
妻の愛程よい糊のシャツを着る
車座の笑いの中に昇る月
錆びついた鎖が過去を索いてくる

- 白 汀
- 久 仁 於
- 勝 一
- 正 敏
- 一 竿
- 千 代
- 義 美
- 四 郎
- 堀 治
- 虹 汀
- 回 天 子
- 岳 人 報
- 板 尾
- 中 川 滋 雀 選
- 佳 句 地 10 選 (前月号から)
- 千 里
- 鎮 彦
- 亜 也 子
- 英 千 子
- 公 一
- 多 賀 子
- 茂 子
- 竹 萌
- ゆ き お
- 一 路

運動会声援風に乗って来る
運動会すんで明日から冬仕度
綱引きの歓声秋空持ち上げる
やき芋が嫌いで今日も翫ぶ女
男の子やき芋好きでからかわれ
ふところに焼き芋入れたあの温さ
祭り来て孫来て財布軽うなり
やき芋を喰べた分だけ運動し
最後まで走り通した子に拍手
綱引きの加勢に親がとんでゆき
焼き芋へ乙女の高い声が追う
過疎の村ダンジリ引く手かり集め
祭り来て朝夕の寒さ身にしみる
祭りすみ耳に太鼓の音残り
祭り好き何かにつけて酒にする
揃い絆纏孫も祭りの顔となる
蔓引けばファミリーの様にながれて
松茸の匂いだけする秋祭り

力津子 美代 美緒 美緒 栄一郎 節子 美佐子 正信 恒子 利重 為之助 澄子 柳太 秀子 岳人 君子報 英佐女 田鶴子 千万子 妙子 楓子 カツ子 智子 節子 いくの 智恵子 恒子 千里

盲愛の手が保護色に染めている
祝い物買う日は少し若くなる
祝賀会ビールは膚で飲むとしり
嫁がせた父へ祝詞を言い出せず
南大阪川柳会 中川 滋雀報
ジंकスを信じ頑固さ押し通す
車椅子通す分だけ開けておく
落人の灯がこぼれている峠
もうそこが峠と妻があとを押す
峠まで送ってくれた赤トンボ
人を泣かせた分もトータル入ってる
トータルの中味に生きてた人間味
トータルをすれば明日が恐くなる
あかぎれの娘でうまいお茶が飲め
当番があの娘でうまいお茶が飲め
出しゃばりで人の当番まで代り
憎まれる当直番でつがなし
当番をすると電話がよくかかる
貴女だけ通れる道をつけておく
鍋の中のとじよう豆腐にだまされる
冷や奴とつふ屋泣かせの雨が降り
感情の乱れとつふが歯にあたる
十円安い土曜の豆腐買ひに行く
値切るともんとントンになるのれん街
悪連のとんとン拍子止らない
岸和田川柳会 植山 武助報
効いたよな気分にくすりも評価され
胃薬に酒も詰め込み旅靴
家伝薬売って昼でも暗い店
見舞客いる時だけを飲むくすり
一年の計元旦の硯石

秋子 久子 いく子 君子 醉々 雀踊子 智子 恒明 凡九郎 好一 千代三 柳宏子 悦郎 形水 二三 文秋 信治 柳伸 智雀 加代子 射月芳 さよ子 浪速子 世界人

堀江正朗・芳子句集
「二人三脚」

出版 祝賀 川柳大会
記念 併せて「いずも賞」発表

時 昭和57年1月24日(日)0時30分
場所 出雲市民会館
出雲市駅西方約八百メートル

柳話 川柳塔編集長橋高 薫風
特別兼題「二人」川柳塔副主管西尾 栄選
兼題「情熱」島根県川柳協会津川 紫助選
「開く」松江番傘川柳社本庄 快哉選
「手」川柳塔まつえ小林孤呂二選
「堀」むらくも川柳会藤井 明朗選
「タイムिंग」 選者当日発表

席題 当日一題 尼 緑之助選
会費 三、五〇〇円「二人三脚」贈呈・祝宴共
一句集「二人三脚」購入済御不要の方の会費三、〇〇〇円
参加料三二〇〇円(郵券可)
一月二十二日迄に届くよう

千 633 出雲市大津町朝倉
板垣草丘宛お送り下さい

本社新年句会

日時 一月七日(木) 午後六時
会場 金属会館

南区 鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271-3935

おはなし

若本多久志

★短冊交換会(一人三点以内)

★56年度月間賞杯授与と全出席者表彰

兼題

「儲ける」

板尾岳人選

「雑煮」

村田瓢太選

「孟」

神谷凡九郎選

「犬」

黒川紫香選

席題
費 二題 当日発表
五百円

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

2月の兼題 「暗指」「示名」「結躰」「ぶ」

新春おめでとう会は1月15日
本社2月句会は7日(木)

お願い

誌代その他のご送金は必ず左記・会計室へお願い致します。(現金書留または郵便振替をご利用下さい)
なお広告原稿、有料投句箋等を同封の場合も会計室へお送り願います。

会計室

〒581 八尾市中田二一三〇二

高杉 鬼遊方

振替口座 大阪三三三六八番

募集

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
水煙抄(10句) 正本 水客選
愛染帖(3句) 橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)

「手腕」 梅谿庵 不醉選

「石仏」 清野こう選

「父」 横地雅風選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内、文字は楷書で新かなづかいにしてください。

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
水煙抄(10句) 正本 水客選
愛染帖(3句) 橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)

「本番」 原田明春選

「注射」 安藤寿美子選

「玉」 飯田悦郎選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り、★用紙はなるべく柳箋をご利用ください。

1月の常任理事会はお休み

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十六年十二月二十五日印刷
昭和五十七年一月一日発行

編集兼 中島蓬太郎

印刷所 藤原童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(二六)六九一六九一四番

振替口座大阪・三三三六八番

川柳塔改題二百号記念 誌上句集応募用紙

地名

キ
リ
ト
リ
線

市県

雅号

☆同人・誌友に限らず、どなたでも応募出来ます。

☆作品は旧作・新作いずれも可。(10句厳守)

☆参加費 ￥ 2,000

☆締切 3月20日到着まで。

☆郵便小為替と同封で会計室まで送付下さい。

〒581 八尾市中田2丁目302 高杉鬼遊方 川柳塔会計室

昭和四十二年一月九日 第 種郵便物認可
昭和五十六年七月十五日 印刷
昭和五十七年一月一日発行 毎月一日発行

川柳塔

号

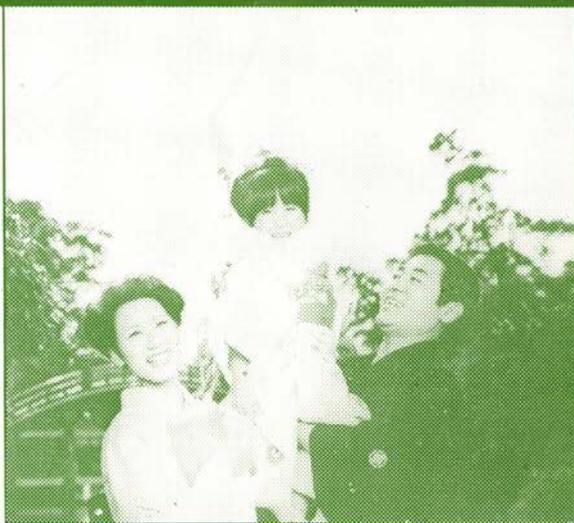
定価

五百円

資料五十円

南海沿線の

初詣



住吉大社
水間観音
高野山

お問合せは
南海国際旅行



南海電鉄

■ なんば641-8686
■ 梅田311-5038 ■ 天王寺623-1641

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちやあしゅうまん
焼売・叉焼饅

大阪・なんば



TEL (64) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心齋橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)